

山梨県西八代郡三珠町

大塚古墳

—北原古墳群の学術発掘調査報告書—

2001・3

山梨県教育委員会

山梨県西八代郡三珠町

大塚古墳

—北原古墳群の学術発掘調査報告書—

2001・3

山梨県教育委員会



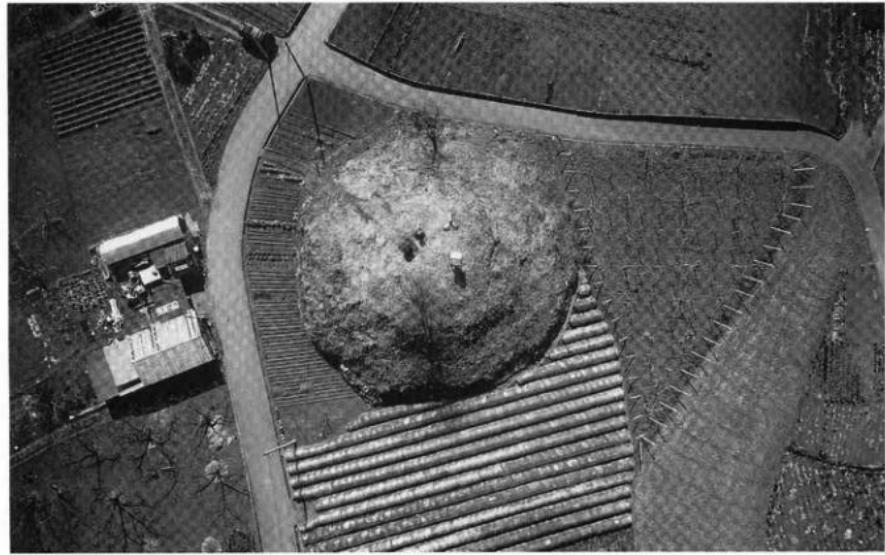
1. 大塚古墳を東上空から望む（奥：伊勢塚古墳）



2. 伊勢塚古墳を西上空から望む（奥：大塚古墳）



3. 大塚古墳（上が南方向）



4. 伊勢塚古墳（上が西方向）

序

甲府盆地の南端にあたり、笛吹川と芦川の合流地点よりやや東に位置する三珠町には、数多くの貴重な遺跡が点在しております。中でも大塚古墳が立地する曾根丘陵上は、赤鳥元年銘対置式神獣鏡が出土したことで知られる鳥居原古墳をはじめとする多くの遺跡や古墳が所在し、遺跡の宝庫として周知されています。また、眺望は常に良好であり、甲府盆地が遠望できる遺跡の立地としては絶好な地域であります。

今回の大塚古墳の発掘調査は、空中写真撮影による墳丘測量と墳丘の周囲におけるトレンチ調査による墳丘規模の確認を目的とする学術調査として平成6年に行われました。

調査の結果、周溝の検出状況及び周辺の地形的環境より全長約61mを測る帆立貝式古墳で、周溝の形態が盾型になると推定されました。また、前方部北側に竪穴造構が確認され、後円部と前方部の二ヶ所に石室を持つ本古墳の特質を考慮した正面観を示唆するものと考えられました。遺物については、円筒埴輪の破片が周溝及び竪穴造構内からまとまって出土し、さらに管玉、鉄鎌・鉄刀・挂甲小札などの鉄製品が前方部の耕作による掘削土のふるい別作業により検出されました。

古墳時代中期の古墳調査事例の少ない本県において古墳様相の一端が明らかにされた点は、学術的に高く評価する事ができるとともに、重要な問題を提起する事にもなりました。本書に掲載する大塚古墳の調査成果は学術的にも大変重要な資料であるばかりか、地域の歴史研究にとって大いに役立つものであると考えております。

本報告書が多くの方々に研究資料としてご活用いただければ幸甚であります。

末筆ながら、種々ご協力を賜りました関係機関各位、地元の方々並びに直接調査、整理に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

2001年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚 初重

例 言

1. 本書は、1994（平成6）年度に実施した山梨県西八代郡三珠町大塚に所在する大塚古墳及び伊勢塚古墳の発掘調査報告書である。なお、伊勢塚古墳の調査は、航空写真測量による図化のみのため付篇として掲載した。
2. 調査は、県内主要古墳の航空写真測量による墳丘測量図作成事業に伴う学術調査であり、文化庁の国庫補助金を受けて山梨県教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターが行い、保坂和博・松土一志が担当した。
4. 本報告書作成のための作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記・接合 保坂和博、佐野眞雪、古屋茂子
遺物復元 平重蔵
遺物実測・拓本 佐野眞雪、古屋茂子、佐野香織、清水真弓、深沢聰美
遺構・遺物写真撮影 保坂和博
遺構・遺物トレース 佐野眞雪
図版作成 佐野眞雪、佐野香織、池谷玲子、佐々木富士子、名取洋子
表作成 保坂和博

5. 本書の編集および執筆は保坂が担当した。
6. 発掘調査時における基準点測量（国土座標測量）及び航空写真測量は株式会社シン技術コンサルに委託した。
7. 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、下記の方々に、ご指導、ご教示を賜った。記して謝意を表す次第である。（順不同・敬称略）
和田 豊、佐野 弘（三珠町教育委員会）、岡野秀典（豊富村教育委員会）、河西 学（帝京大学山梨文化財研究所）

凡 例

1. 掲載した図面の縮尺は、原則として次のとおりである。
<遺構>古墳全体図：1/600 トレンチ：1/80 遺物出土状況図：1/40
<遺物>埴輪拓影図：1/4 土器実測図・拓影図：1/4 鉄製品実測図：1/2 石製品実測図：2/3
2. 遺物図版中の表記は次のとおりである。
 - a. 土器・埴輪の拓影図で両面載せてあるものは、断面左側が外面、右側が内面である。
 - b. 遺物図版中以下のようにスクリーントーンを使用した。
須恵器断面： 鉄製品断面：
3. 遺構図版中の表記は次のとおりである。
 - a. 調査区全体図におけるX・Y数値は平面直角座標第Ⅲ系に基づく各座標数値である。各平面図中の北を示す方位は、すべて座標北を示す。
 - b. 遺構図版中以下のようにスクリーントーンを使用した。
地山： 菁石・石室構築材： 周溝平面プラン確認範囲：
4. 遺物分布図中に使用したドットマークは各図中に示したとおりである。
5. 土色（埴輪胎土）の説明には『標準土色帖（1990年度版）』（農林水産省技術会議事務所監修・財團法人日本色彩研究所監修）に基づいて記述した。
6. 遺構及び遺物写真図版の縮尺は統一されていない。

本文目次

I 調査の概要	1
1 経緯	1
2 組織	1
3 経過	2
4 史跡の指定	2
II 遺跡の環境	3
1 位置と環境	3
(1) 位置	3
(2) 地理的環境	3
(3) 歴史的環境	4
2 これまでの調査	6
III 調査の成果	7
1 概要	7
(1) 調査区の設定	7
(2) 基本層序	7
(3) 調査の方法	7
(4) 遺構・遺物の概要	7
2 周溝の調査	7
(1) 周溝	7
(2) 遺物の出土状態	8
3 穫穴遺構の調査	8
(1) 穫穴遺構	8
(2) 遺物の出土状態	8
4 前方部の調査	8
(1) 前方部	8
(2) 前方部の遺物	8
5 出土遺物	8
(1) 墓輪	8
(2) 武具類	11
(3) 装身具類	11
(4) 土器	11
6 まとめ	11
(1) 遺構の検討	12
(2) 遺物の検討	13
(3) 本県における大塚古墳の位置づけ	13
付 謄	
伊勢塚古墳の調査	15
別 表	
遺物一覧表	17

挿図・表目次

I - 1 調査進行表	2
II - 1 三殊町地形図	3
II - 2 三殊町地質図	3
II - 3 曽根丘陵上の古墳	5
II - 4 大塚古墳測量図	6
II - 1 円筒埴輪口縁部分類図	9
II - 2 円筒埴輪凸帯分類図	9
II - 3 B種ヨコハケの組分	9
II - 4 大塚古墳周溝推定図	12
III - 5 山梨県内出土埴輪觀察表	13
付 謄	
第1図 伊勢塚古墳近景（左奥：大塚古墳） （西から）	16
第2図 伊勢塚古墳墳頂より大塚古墳を望む （西から）	16
第3図 伊勢塚古墳測量図	16
別 表	
遺物一覧表	17

図版目次

1 周辺の遺跡分布図	
2 遺跡周辺の地形	
3 大塚古墳調査区全体図	
4 第1・3・5・トレンチ	
5 第2トレンチ	
6 第1トレンチ内周溝部の遺物出土状況1	
7 第1トレンチ内周溝部の遺物出土状況2	
8 第2トレンチ内空穴遺構の遺物出土状況1	
9 第2トレンチ内空穴遺構の遺物出土状況2	

遺物実測図

10 墓輪1	
11 墓輪2	
12 墓輪3	
13 墓輪4	
14 墓輪5	
15 墓輪6	
16 武具類1	
17 武具類2 装身具類 土器	

遺構写真

18 大塚古墳概況	
1: 通路遠景（南から）	
2: 墳丘部東側（大塚台地頂部付近）	
3: 墳丘部東側削平状況	
4: 墳頂部より豊富村王塚古墳を望む	
5: 前方部墳丘に放置された葺石等	
6: 前方部墳丘に放置された天井石	
19 第1トレンチ調査	
7: 調査風景（南から）	
8: トレンチ完掘状況（北から）	
9: 周溝及び遺物・葺石検出状況（南から）	
10: 周溝検出状況（北から）	
11: 周溝覆土断面（東から）	
12: 周溝内遺物・葺石出土状況（北から）	
13: 墳端部検出状況（北から）	
14: 墓輪部検出状況（東から）	
20 第2トレンチ調査	
15: 調査風景（南西から）	
16: トレンチ完掘状況1（北西から）	
17: トレンチ完掘状況2（北から）	
18: 穴遺構断面（西から）	
19: 前方部墳端南西コーナー検出状況1（南から）	
20: 前方部墳端南西コーナー検出状況2（西から）	
21: 穴遺構内遺物出土状況1（東から）	
22: 穴遺構内遺物出土状況2（東から）	
23: 第3・4・5トレンチ調査	
23: 第3トレンチ完掘状況（西から）	
24: 第3トレンチ周溝覆土断面（北から）	
25: 第3トレンチ墓輪部検出状況（北から）	
26: 第4トレンチ完掘状況（西から）	
27: 第5トレンチ検査前（南から）	
28: 第5トレンチ断面（南西から）	
29: 第5トレンチ羅群（石室）検出状況1（西から）	
30: 第5トレンチ羅群（石室）検出状況2（西から）	

遺物写真

22 墓輪（外面）		
31 円筒埴輪11	32: 円筒埴輪2	33: 円筒埴輪3
34: 円筒埴輪1	35: 円筒埴輪5	36: 円筒埴輪6
37: 円筒埴輪9	38: 円筒埴輪10	39: 円筒埴輪13
40: 円筒埴輪15	41: 円筒埴輪16	42: 円筒埴輪17
43: 円筒埴輪19	44: 円筒埴輪20	45: 円筒埴輪21
46: 円筒埴輪22	47: 円筒埴輪26	48: 円筒埴輪31
49: 円筒埴輪33	50: 円筒埴輪46	
23 墓輪（外面・内面）		
51: 円筒埴輪52	52: 円筒埴輪56	53: 円筒埴輪57
54: 円筒埴輪58	55: 円筒埴輪60	56: 円筒埴輪61
57: 円筒埴輪67	58: 円筒埴輪69	59: 円筒埴輪3
60: 円筒埴輪10	61: 円筒埴輪13	62: 円筒埴輪16
63: 円筒埴輪17	64: 円筒埴輪19	65: 円筒埴輪22
66: 円筒埴輪57	67: 円筒埴輪58	68: 円筒埴輪60
69: 円筒埴輪61	70: 円筒埴輪67	
24 墓輪（底面・外面）		
71: 円筒埴輪57	72: 円筒埴輪58	73: 円筒埴輪60
74: 円筒埴輪61	75: 朝顔形埴輪70~74	
76: 器種不明埴輪75~79	77: 土器	
78: 武具類・装身具類	79: 装身具類	

I 調査の概要

1 経緯

(1) 経緯

遺跡は全国的に都市化など様々な要因により、移りゆく時の中で変貌を遂げ、その多くは発掘調査後に姿を消していく今日の状況がある。一方、古墳などのように風化現象や開墾などにより崩壊し、調査前に自然消滅し、保存が危ぶまれる場合も多い。このような中、県内の主要古墳に対する現況の把握・保存の必要性が高まり、山梨県教育委員会が文化庁の国庫補助金を受けて学術調査を実施することとなった。調査内容は、航空写真測量による同一基準に基づく各古墳の墳丘測量図化と墳形及び墳丘規模の確認作業である。調査を行う古墳については、墳丘や周囲の状況を考慮し、今回は三珠町の大塚古墳と伊勢塚古墳を選定し、土地所有者と協議し、耕作物に影響を与えない地点にトレーンを設定し、平成7年2月末から3月中旬に調査を実施した。

なお、伊勢塚古墳の調査は、航空写真測量による図化のみのため調査概要を付篇として掲載した。

(2) 目的

今回の調査は、現況の把握・保存を目的とするものであるが、県内において調査例の少ない古墳時代中期の古墳の実相を探り、その成果をもって、曾根丘陵上の古墳編年の一端を解明することにも努めた。これらの目的を達成するため調査において、①周溝の調査によって、その構造を確認することと、墳形及び規模を確定すること。②出土遺物の検討から古墳編年の精密さを計ることを企図し、調査を実施した。

(3) 現況

大塚古墳は三珠町の北東端にあたる曾根丘陵の一枝丘である大塚地区の舌状台地上に占地し、標高310m前後を測る。JR身延線甲斐上野駅の北東約1kmに位置する。本古墳は帆立貝式古墳で、現状での規模は全長約40m、後円部径35m、高さ約5m、前方部の長さ約5m、幅9m、高さ約1mを測るが、墳頂部をはじめ墳丘裾部は耕作や土砂の採取により激しく削平され、原形を留めていない状況である。地点ごとに見ると墳丘頂部では後円部：乱掘された穴が残存、前方部：耕作、裾部では東（後円端部）側：盛土採取・葡萄棚設置、西（前方部端部）側：高さ50cm程の石垣造成・耕作、南側：耕作（野沢菜）、北側：農道設置によりそれぞれ削平を受けている。

昭和初期の仁科義男氏による報告^{〔1〕}には、大塚古墳を北原古墳群（第5群）の第1号墳として、詳細に当時の状況を記述しており、現状との比較検討資料としてここでふれておく。

「第1号墳（大塚） 前方後円墳」本群の最北端に占居するもので、主軸の方向南北：長さ70.00、前方部：長さ（現存部）8.00、基底径（推定）9.50、高さ1.50。後円部：基底径40.00、高さ9.00、頂点径13.00。以上は判明せる計測の数字であるが、何分往年不要意なる開墾発掘により著しく原形を損じて、後円部の周囲は約2メートルの高さに削取せられ、頂点においても攪拌のため不整形となり、前方部も個人の私有なるためか農作によりわざかにその形態を存するのみであった。本墳も豊富村王塚とひとしく埴輪円筒の装備がある。所有者窟田善藏氏の談によれば、前方部開墾の際、古鏡、刀剣の数個を発掘したといわれ、筆者の調査にあたっても後円部頂点の表土より80センチ程の所より直刀の破片を採集した。その際酸化鉄塗布の石塊多数が土中に混在していることを認めた。前方部も耕作せられ麦畑となっており、頸部の位置に一枚の巨大板石が露出しているなど、いかにも不要意な発掘が行われたことを物語っている。副葬品の如きも現今いざれに転々せるものか、一個といえども此の付近に触目することが出来ないのは誠に遺憾の極みといわざるを得ない。」と記され、当時すでに著しい削平を受け、また墳丘各部計測値の現状との相違より、この報告以後の削平状況が窺える。

註1 仁科義男 「東八代郡豊村及び大塚村古墳群の調査」「史蹟名勝天然記念物調査報告8」山梨県 1935

2 組 織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	保坂和博、松土一志（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
発掘調査作業員	窟田あや子、塩島富美子、樋口かず子、村上てる子、森田さつ子、山村てるよ、渡辺俊夫
整理作業員	平成10（1998）年度：佐野慎雪、古屋茂子
協力者・機関	平成12（2000）年度：佐々木富士子、清水真弓、名取洋子、深沢聰美、佐野香織、池谷玲子 和田 豊、佐野 弘（三珠町教育委員会）、岡野秀典（豊富村教育委員会）、河西 学（帝京大学山梨文化財研究所）
	<発掘調査地の地権者及び耕作者>
	大塚古墳：有泉武雄、窟田恒幸、窟田広仁、齊木あい子、齊木ひさし、塩島善一、土橋 忠次、内藤昭六、樋口富一、袋榮幸登
	伊勢塚古墳：鷹山房枝、石川広由、石原俊彦、窟田長英、倉金正弘、塩島清、塩島善一、塩島米子、菱壁文次、菱岱幸登、三神高広

3 経過

発掘調査・整理作業及び文化財保護法に基づく手続き等の経過は以下のとおりである（表Ⅰ-1）。

＜發掘調查・整理作業＞

平成6(1994)年2月28日～3月12日　発掘調査(3月1日：航空写真測量実施)

平成10(1998)年4月13日～11月30日 基礎的整理作業

平成12(2000)年10月1日～平成13(2001)年3月31日 本格的整理作業

＜文化財保護法に基づく手稿き>

平成6（1994）年2月28日 文化庁長官宛てに、文化財保護法第98条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出

平成6(1994)年3月18日 市川大門警察署長宛てに、文化財保護法第98条の3に基づく「埋蔵文化財の発見通知」を提出

4 中跡の指定

大塚古墳は昭和44年4月24日、伊勢塚古墳は同年4月17日にそれぞれ三珠教育委員会により「三珠町史跡」に指定され、また大塚古墳は平成9年5月7日に山梨県教育委員会により「山梨縣中跡」にも指定されている。

I-1 調查進行表

II 遺跡の環境

1 位置と環境

(1) 位置

大塚古墳は甲府盆地南端域、北緯 $35^{\circ} 33' 43''$ 、東経 $138^{\circ} 30' 51''$ の山梨県西八代郡三珠町に所在し、JR甲府駅より直線で南南西、約12kmに位置する。隣接町村は北西を流れる笛吹川を越えて田富町、玉穂町と、北は右左口峠一桜峠の尾根を境界として、豊富村、中道町と、東は駿迎ヶ岳一芦川一右左口峠を境界として、上九一色村と、南は蛾ヶ岳一駿迎ヶ岳の尾根を境界として下部町と、西は芦川を境界として、市川大門町とそれ接している。

(2) 地理的環境

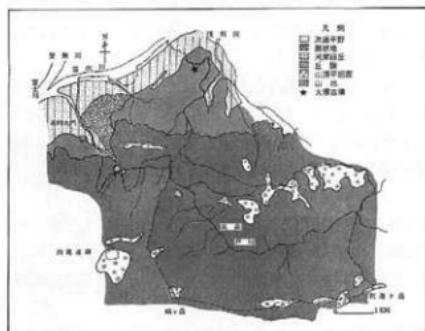
三珠町の地形

遺跡が所在する三珠町は、御坂山地より笛吹川に至る北西一南東方向に長軸をとるL字形を呈し、町域の南東方4分の3は山地が占め、北西方4分の1は丘陵性平坦地、低地平坦地（沖積平野）と大別され、甲府盆地南端部に向け漸次高度を減じる地理的特徴を示している（図II-1）。

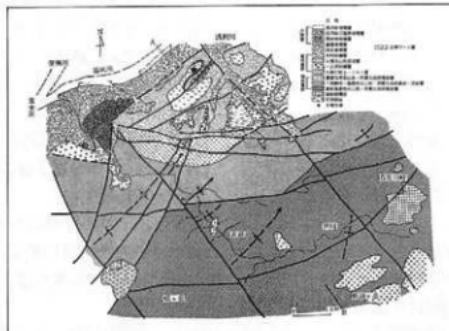
山地地域は、河口湖北方の黒岳（1,793m）を主峰とし、東西方向に800m級の主山脈が走る御坂山地が連なり、富士北麓と甲府盆地を分断している。町域では西に向かって流下する芦川を挟んで、北方に右左口峠一関原峠一大峠一桜峠を結ぶ北列山系と、南方の駿迎ヶ岳一八坂峠一アンバ峠、地蔵峠一折門峠一大平山一蛾ヶ岳一大畠山を結ぶ南列山系で構成され、丘陵性平坦地へと続く北列山系の北斜面域は 16° ～ 24° の比較的急な斜角面を形成している。集落は芦川下流域の下九一色地区に僅かに見られ、ほとんど森林が一帯を占めている。

丘陵性平坦地地域は、曾根丘陵と呼ばれ、甲府盆地と御坂山地の間に、盆地側に急傾斜、山地側に緩傾斜のベンチ型を呈している。その規模は東方の境川村から西方の市川大門町に至る約12km、最大幅約3kmを誇り、町域では丘陵南西端にあたり、標高300m前後、低地平坦地（沖積平野）との標高差約70mを測る。丘陵上には御坂山地北列の尾根を副分水線とする諸河川、浅利川、芦川などが北西方向に並列的に流下し、丘陵下で笛吹川に合流している。集落は大塚地区を中心に形成され、またかつてその多くが桑畑であった丘陵地は、今日では農業の生産性規模の拡大とともに果樹園地化し、大塚ニンジン・ゴボウ・山イモ・野沢菜等の栽培も行われるようになり、県内での主産地として知られている。

低地平坦地地域は、御坂山地より流下する芦川が甲府盆地に達した地域に発達した芦川扇状地及び笛吹川により形成された氾濫原と構成され、標高250m前後を測る。芦川扇状地には上野地区など、多くの集落が見られ、町の中核地域となり、一方氾濫原は水田地域の中心地を形成している。



II-1 三珠町地形図



II-2 三珠町地質図

三珠町の地質

地質的にも地形と同様、御坂山地、曾根丘陵、沖積平野により三大別される（図II-2）。

御坂山地地形部は新生代新第三紀中新世の海底火山堆積物である御坂層群が構成している。この層群はグリーンタフ帯を生成しており、大塚古墳の出土埴輪の胎土中に多量に見られる緑色変質した第三紀火山岩類（グリーンタフ）との関連性が注目され、御坂山地を流下する諸河川（浅利川など）により大塚古墳周辺地域に供給されたと考えられる。

丘陵地形部は古甲府盆地堆積物の新生界新第四紀洪積世の曾根層群が構成している。この層群は本村砂礫層、大塚火碎性泥流層、一之沢砂礫層、大森川粘土・シルト層に分層され、古墳が立地する大塚地城では最上部に王塚ローム層の堆積が確認されている。今回の調査では現地表下約1mで疊層を検出した地点（第4トレンチ）があり、王塚ローム下の他の層群との関わりを探る試料になると考えられる。

沖積平野地形部（甲府盆地南端部）は新生界第四紀沖積世の新しい砂礫層が構成している。この層群は笛吹川や芦川流域の現河床氾濫原堆積層、現河床堆積層などに分層され、岩相は花崗岩、石英閃綠岩、硬砂岩、安山岩、石英安山岩等の種々の円礫を含む砂礫層を主体としている。注目されるのは大塚古墳出土の埴輪の胎土中に花崗岩が見られる点である。花崗岩は笛吹川上流域に分布し、この地域にもたらされたものであり、前述のグリーンタフと合わせ浅利川が笛吹川に合流する辺りで埴輪の原料となる粘土の採取が行われたものと推定される。

遺跡の立地

大塚古墳は三珠町の北東端にある曾根丘陵の一枝丘である大塚地区の舌状台地上に占地し、標高310m前後を測る（PL-2）。この古墳をのせる台地（曾根丘陵）の背後（南側）は東西方向に連なる御坂山地が控え、前面（北側）は標高250m、丘陵との比高差約70mを測る笛吹川氾濫原（沖積平野）における水田地帯が広がり、笛吹川を越え、さらに甲府盆地が展開している（図II-3）。また、台地の東側は御坂山地より浅利川が、西側は芦川が北流し、台地先端の北方でそれぞれ笛吹川と合流している。芦川河口部では扇状地が形成されている。

古墳の後円頂部からの展望は、西に南アルプス連峰、北に甲府盆地をへだてて遠く八ヶ岳や秩父の峰々を望み、盆地内への眺望は見事である。

(3) 歴史的環境

本項では曾根丘陵を中心とした古墳の様相を概観してみることにする。曾根丘陵は背後の御坂山地を源とする中小河川により幾つもの台地（支丘）に分断され、これらの台地上には甲府盆地を見下ろすように丘陵中央部の東山古墳群、金沢古墳群、米倉山古墳群をはじめ、東端の八乙女古墳群、西端の三星院古墳群、北原古墳群など多くの古墳群が存在することで知られる。弥生時代の終わり頃、中道地域における世帯共同体の家父長層の墳墓群とされる上の平遺跡（g）に見られる周溝墓群が形成されるが、家父長層より傑出した族長が地城集団の首長となり、権力を体現したものが、のちの古墳造営であり、上の平遺跡方形周溝墓群はまさに古墳出現前夜の社会体制を端的に象徴するものといえよう。中道周辺で東山古墳群、米倉山古墳群をはじめとする各古墳群が形成されたのは、古墳文化の流入ルートとして太平洋側から富士西麓より御坂山塊を通り、中道付近へ抜ける「中道往還」が想定され、山梨の古墳文化形成に重要な役割を果たしたものと考えられ、中道勢力がヤマト王權と結びつき、古代甲斐国を統治し、前方後円墳を築造できるなど巨大な権力を握れた要因として中道町東山、米倉山地城がまさに中道往還のルート上にあり、地理的に恵まれていたことが挙げられる。

4世紀の中頃、丘陵中央部の米倉山の米倉山B遺跡（e）において方形周溝墓が造られたり、北東斜面の鞍部に県内唯一の全長45mを測る前方後方墳の小平沢古墳（G）が造られた。続いて東山丘陵に大丸山古墳（I）、甲斐銚子塚古墳（J）、丸山塚古墳（k）が次々に造られるようになる。甲斐銚子塚古墳は東日本最大の規模を有し、埋葬状況は畿内の色彩が強いもので、甲斐銚子塚古墳の被葬者がヤマト王權と結びつきが深く、東国經營の拠点的役割を果たしていたことを窺わせる。

5世紀になると、米倉山に前方後円墳である天神山古墳（H）や東山丘陵に円墳であるかんかん塚古墳（N）が造られる。天神山古墳は全長132mを測る前方後円墳で、丘陵上の他の古墳が丘陵先端部に集中するのに対し、丘陵の中間部という特異な位置である。かんかん塚古墳からは木芯鉄板張輪轍などが出土し、山梨では初現期の馬具出土古墳として注目される。

4世期末から5世紀初頭にかけて、中道町以外でも古墳が造られるようになる。曾根丘陵の東端に位置する全長92mの前方後円墳の八代町岡銚子塚古墳（S）がそれである。



I-3 曽根丘陵上の古墳 ①：東山古墳群 ②：米倉山古墳群
③：王塚古墳 ④：大塚古墳 ⑤：伊勢塚古墳

では、いずれも10基程が確認されたが、現在では王塚古墳（E）と三星院古墳（F）がそれぞれ遺存するだけである。王塚古墳は全長約61mを測る帆立貝式古墳で、県内唯一の合掌形石室が確認され、B種ヨコハケを施す円筒埴輪が施され、5世紀後葉の築造とされる。三星院古墳は全長45mの帆立貝式古墳である。田見堂・鳥居原古墳群と北原古墳群は三珠町に属し、前者には赤鳥元年銘神獸鏡が出土した円墳とされる鳥居原狐塚古墳（D）が存在する。後者は丘陵西端部の大塚台地上に位置し、本報告の帆立貝式古墳の大塚古墳（A）が主墳となり、南西300mに伊勢塚古墳（B）が存在している。この他、八代町の帆立貝式古墳の狐塚古墳（R）、前方後円墳とされる团栗塚古墳（T）などが築造されるようになる。いずれも墳丘長100mを大きく越えるものではなく、同時期東国各地の古墳が大型化する現象と対照的である。中道町の銚子塚古墳を中心とした支配構造が変動、拡散する5世紀中頃以降に造られたこれらの古墳群は、そうした支配層の拡散の受け皿となった重要な地域と考えられる。

6世紀に入ると横穴式石室が導入されるようになり、有力古墳の分布が甲府盆地内に分散するようになる。甲府市万寿森古墳や八代町莊塚古墳（U）を初現として、6世紀後半には横穴式石室の規模が全国最大級である御坂町姥塚古墳や甲府市加牟那塚古墳も現れる。

6世紀末から7世紀代になると、甲府市北部の横根・桜井積石塚古墳群、竜王町・双葉町赤坂台古墳群、一宮町四ツ塚古墳群、同町千米寺古墳群など円墳が密集する群集墳が各地で見られるようになる。また、春日居町寺の前古墳、中道町福荷塚古墳（L）など7世紀以降の古墳から仏教の儀式に使われる銅碗が出土するようになり、仏教文化の伝来が窺われ、有力者は古墳の築造から寺院の建立に権力誇示手段が移行していく。

一方、近年では曾根丘陵に弥生時代後期から古墳時代中期の方（円）低墳墓（周溝墓）である三珠町一条氏館跡（a）・上野遺跡（b）、中道町米倉山B遺跡（e）・宮ノ上遺跡（f）・上の平遺跡（g）・東山南遺跡（h）・東山北遺跡（i）・岩清水遺跡（j）、境川村諏訪尻遺跡（k）等が調査され、盆地内の造墓集團や同一造墓集團内の多様なあり方が明らかにされつつある。境川村牛居沢窯跡①は6世紀末葉～7世紀中葉とされる須恵器の窯窓であり、県内で未発見の埴輪の窯窓の立地を探る遺跡として重要である。

5世紀後半になると、中道町以外の各地で古墳が築かれるようになり、勢力の拡散が曾根丘陵全域に及び、八乙女、宇山平、田見堂・鳥居原、北原、三星院などの古墳群が造られはじめる。八乙女古墳群は境川村に属し、丘陵東端部の坊ヶ峰の北西麓に位置し、馬乗山1・2号墳（O）、表門神社古墳（P）などにより構成されている。馬乗山1号墳は複数の埋葬施設を持ち、2号墳は5世紀後半代の築造とされる県内最後の前方後円墳で、全長約60mを測る。表門神社古墳は帆立貝式古墳で、B種ヨコハケを施す円筒埴輪が出土し、5世紀末から6世紀初頭とされる。宇山平古墳群と三星院古墳群は豊富村に属し、昭和10年の古墳現状調査

2 これまでの調査

大塚古墳は、今回の調査の前後に5回にわたる報告及び調査が実施されている。その概要をまとめておく。

<今回の調査前に実施された調査>

① 昭和初期の仁科義男氏による報告^(注1)

この報告は前章「I 調査の概要」で記述したように当時の墳丘部の遺存状況などが詳細にまとめられている。

② 立正大学考古学研究室による調査^(注2)

昭和40年(1965)に立正大学考古学研究室により、測量調査が行われた。

③ 小林広氏による調査^(注3)

昭和56年2月20~25日に墳丘測量及びトレントによる周溝の確認調査が行われ、「前方部は開かず突出するが小形で帆立貝形を呈し、全長65mの盾型の周溝が巡る」ことを確認している(図II-4)。

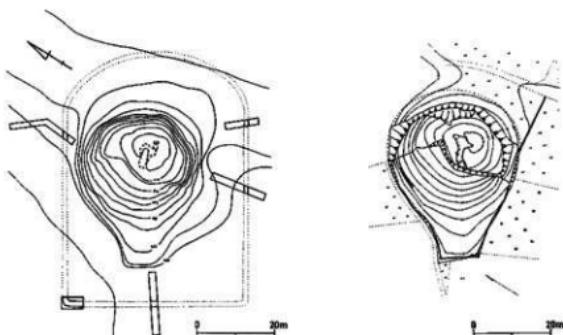
④ 早稲田大学考古学研究室による調査^(注4)

昭和51年10月に墳丘測量調査が行われ、全長46m、後円部径36m、同高さ6.5m、前方部長さ10m、前端幅9.5m、同高さ1.5mを測る帆立貝式古墳であることを確認している。測量図は三珠町誌に掲載されている(図II-4)。

<今回の調査後に実施された調査>

今回の調査中に平成5年12月に耕作者が前方部に幅50cm、長さ10m、深さ60cm程の溝を掘ったところ、中央付近から青銅製鉤釧、直刀、挂甲の小札類、鐵鎌、玉類の遺物とともに多量の石を発見していたことが確認された。このため前方部にも石室が存在する事が推定され、三珠町教育委員会により平成5年10月4日~12月14日にかけて調査が実施された。調査の概要是和田豊氏により以下のように報告^(注5)されている。

「前方部に主軸方向のトレント1本、主軸と直行するトレント2本、後円部に主軸方向のトレント1本設定した。前方部の中央において竪穴式石室石室が発見された。遺存状態は極めて悪く、壁と床の一部が僅かに残存しているに過ぎない。長さ3.5m前後と推定され、幅1m前後である。主軸は墳丘の主軸方向と一致する。床面には小石が敷かれ、赤彩がなされている。側壁は人頭大の川原石が積まれているが、後円部側の奥壁にあたる東壁には偏平な石が使用されている。西壁は全く遺存していないため、偏平な石が用いられたかどうかは不明である。石室内から六鈴鏡1点、横矧板銀留短甲1点、挂甲小札類多数、鐵鎌多数、玉類数点、橢円形鏡板付骨他馬具、鉤釧1点、直刀5振以上、その他金銅製品(胡算金具の一部と思われるもの等)などが出土した。昭和初期の報告に記された鏡、刀・劍藻この石室から掘り出されたものと思われる。前方部を横断する2本のトレントの両端から人頭大の河原石を使用した葺石が検出され、周囲の畑の下まで達している可能性がある。後円部のトレント内で竪穴式石室の構成材と思われる大形の石が検出された。トレントの搅乱土中からは短甲の破片が出土し、石室内から掘り出されたもの一部であろう。」



II-4 大塚古墳測量図(左:小林氏 右:早稲田大学考古学研究室 作成)

注1 仁科義男 「東八代郡豊富村及び大塚村古墳群の調査」『史蹟名勝天然紀念物調査報告8』山梨県 1955

注2 坂詠秀一 「山梨県下における崩壊残存する古墳の実測図作成について」『富士国立公園博物館研究報告』第14号 1965

注3 小林広和・里村亮一 「各地域における最後の前方後円墳 東日本」『山梨県』『古代学研究』105 1984

注4 山本寿々雄 「第1章先史・古墳時代」『三珠町誌』 1980

注5 和田 豊 「特集:甲府盆地における古墳研究の現在 三珠町大塚古墳」『帝京大学山梨文化財研究所報』第24号 1995

III 調査の成果

1 概要

今回の調査では、現況を把握・保存するために墳丘測量図化と墳丘周囲の各所にトレンチを設けて、墳形及び墳丘規模の確認調査を行った。

(1) 調査区の設定

発掘調査にあたっては、グリッドを設定せず、後円頂部の三角点(X : -46,996.460 Y : 5,192.580 z : 317.508m)を基点として、前方頂部に1点、墳丘周囲に2点の測量基準点を設け、4ヶ所にトレンチを設定した(PL-3)。

(2) 基本層序

墳丘周囲の層序は、比較的安定した堆積状況を呈する第1・2トレンチの土層セクションの観察より、遺構検出面まで2層に分層され、表土層(第1層)下の第2'層までは耕作による擾乱が激しく受けている(PL-4)。

(3) 調査の方法

調査前の墳丘は耕作や土砂の採取により崩落し、原形を留めていない状況であった。このため墳形及び墳丘規模を明らかにするために墳丘周囲の4ヶ所にトレンチを設定し、人力による掘り下げを行い、周溝などの遺構検出に努めた。その後、遺構内の精査を進めた。今回の調査面積は約180m²である。

本来ならば後円端部東側及び南側にもトレンチを設定したかったが、肝心な所に葡萄棚や耕作物があるため、断念せざるを得なかった。なお、大塚古墳は町史跡に指定されているため、墳丘部の調査を今回行う予定はなかったが、平成5(1993)年12月に前方部の畠地から耕作者が鉤鋤や太刀を発見していたことが調査中に確認されたため、耕作により掘削された部分を第5トレンチとして精査を行なった。

検出された周溝などは縮尺1/20で実測した。また、墳丘測量図の作成にあたっては、各トレンチ内の遺構の実測図と航空写真測量(図化面積: 約2,200m²、等高線間隔: 20cm)の成果を合成して縮尺1/600測量図を作成した(PL-3)。

遺物はレベリング及び平面図に記録後に取り上げた。

(4) 遺構・遺物の概要

今回の調査で確認できた遺構は周溝部、竪穴遺構、石室と推定される砾群集中部であり、遺物は埴輪、挂甲小札、直刀・鐵鎌などの武具類、管玉・金環などの装身具類、土器(須恵器・土師器)などが出土している。以下、各遺構・遺物についてまとめてみたい。

2 周溝の調査

(1) 周溝

3ヶ所のトレンチで確認することができた周溝は各地点でやや遺存状況が異なっていた。

第1トレンチでは、遺構確認面(地山面)で周溝の平面プランを確認し、周溝の一部にサブトレンチを設け、立上がり及び周溝底部の調査を行った(PL-4)。この結果、後円端部より幅50cm程の平坦面を挟み、周溝内側の立上がりが確認された。遺構確認面での計測値は周溝幅約4m、深さ約60cmである。さらに、これを断面でみると、墳丘側では約40度、外側約45度と緩やかな傾斜で立上がる。覆土は3層に分層される。

トレンチ内には幅約3m、深さ約40cmの溝状の掘り込みが確認されたが、覆土の状況等から根切溝と判断した。

第2トレンチでは、幅2.4mで北西-南東方向に延びる周溝の平面プランを確認したが、周溝内の調査は実施しなかった(PL-5)。トレンチ内には、黒色覆土の埋没した竪穴遺構も検出された。

第3トレンチでは、幅2.4m、深さ30cmを測る周溝を検出したが、周溝底付近のみ残存している状況である(PL-4)。覆土は、1層(黒色土)のみである。周溝より墳丘部側に幅約3.2m、深さ約50cmの掘り込みが検出されたが、覆土及び遺存状況等により後世の擾乱と判断した。

なお、第4トレンチでは耕作による擾乱のためか周溝の検出にはいたらなかったが、現地表下約1mで王塚ロームと考えられる砾層が確認された。

(2) 遺物の出土状態

周溝内の出土遺物には本墳に伴うと見られる多量の埴輪があり、第1トレンチ内周溝部から出土している。

埴輪（PL-6・7）

円筒・朝顔形・器種不明埴輪が墳丘端部よりの周溝覆土上層（3層）を中心に確認され、墳丘に樹立されていたものが時間を経て周溝内に転落したものと推定される。円筒埴輪は2次調整B種ヨコハケのBd類（口縁部・胴部）の2・13・14・21・47・50・51・54やBa”類（口縁部）の26・27・37・49がまとまって確認され、それぞれ同一個体の可能性がある。朝顔形埴輪の71~74、器種不明埴輪の75・77・79が確認されている。円筒埴輪と朝顔形埴輪との配置関係は不明である。

3 竪穴造構の調査

(1) 竪穴造構

第2トレンチでは、L字状に配された石列（拳大から人頭大）が長さ約10m、幅約3.6m、深さ約60cmの掘り込み内に確認された。南北方面の石列は竪穴造構底部から墳丘部側に12度の傾斜で葺かれており、前方部の北西側墳端部と推定される。

(2) 遺物の出土状態

竪穴造構からは、本墳に伴うと見られる多量の埴輪、さらに弥生時代中期、古墳時代前期の土器片がある。

埴輪（PL-8・9）

円筒・器種不明埴輪が竪穴造構覆土中層（3層上面）を中心に確認され、墳丘に樹立されていたものが時間を経て竪穴造構内に転落したものと推定される。円筒埴輪は2次調整B種ヨコハケのBb-1”類（口縁部）、Bd類（胴部）の1・3・7・11・16・34・18・19、Bd類（口縁部・胴部）の5・12・20・33・39・40・46、Ba”（口縁部）の8・28・30・31・52などがまとまって確認され、それぞれ同一個体の可能性がある。器種不明埴輪は76・78が出土している。

4 前方部の調査

(1) 前方部

耕作により開墾された前方部中央の主軸に直行する南北方向に長さ約10m、幅約50cm、深さ約60cmの範囲を第5トレンチとして精査を行った。土層観察の結果、鈴鉄、太刀が発見されたトレンチ中央部に人頭大の河原石が集中し、土壤に朱が混在していることが確認され、この地点に石室が存在すると推定された。

(2) 前方部の遺物

第5トレンチ内及び前方部頂の耕作による開墾で掘りおこされた（第5トレンチの脇に積まれた）土を全て篩別し、遺物の検出に努めた。その結果、碧玉製管玉5点と挂甲小札48点・鉄鎌2点・直刀1振等の鉄器片が確認された。いずれも現位置を止めているものではないが、前方部石室内の副葬品と考えられる。また、前方部一帯から埴輪の小破片が散在して出土し、墳丘上に配置された埴輪が後世の耕作等により破壊行為を受けた状況が捉えられる。

5 出土遺物

今回の調査では、埴輪が周溝や竪穴造構から、武具類・装身具類・土器が前方部の開墾による掘削土（第5トレンチ内耕作土）の篩別によって出土した。以下、各遺物の概要を列記する。

(1) 墓 繩

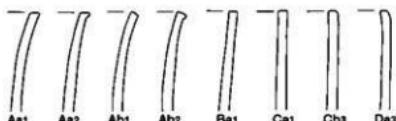
① 墓繩の概要

今回の調査で出土した埴輪は、第1トレンチ内の周溝及び第2トレンチ内の竪穴造構を中心に確認された。しかし、それらは墳丘流土中から出土したものであり、原位置を確認できたものはない。それゆえに、すべて破片のため全体の形状を捉えられず、各段高・口径・底径などが判明しているものは数少ない。これらの

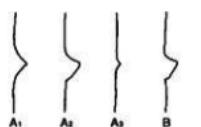
破片資料を観察すると、器面調整、凸帯・口縁部の形態などの諸点において、バラエティーがあることがわかる。そこで、調整の特徴や各部位ごとにみられる形態的特徴に基づく分類を観察表（別表 遺物一覧表 墓輪）に提示し、各々の墓輪を整理し、本古墳の出土墓輪の特徴を捉えてみたい。

② 分類基準（観察表の凡例）

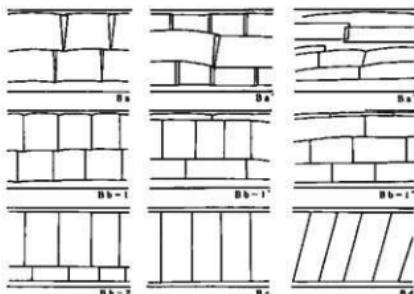
- 1 器種：円筒墓輪・朝顔形墓輪に大別され、僅かに器種の不明なものも見られる。第1・2段のみが残存している個体に関しては、円筒であるか朝顔形であるかの判別がつかないため、円筒墓輪として扱った。
- 2 出土位置：1トレンチ検出の周溝覆土（a）・耕作土（a'）、2トレンチ検出の竪穴遺構（b）・耕作土（b'）、5トレンチ篩別（c）、前方部頂表採（c'）の省号で記す。
- 3 法量：器高の欄には、上の段から順番に各段高を記し、（）内の数字は現在高を示す。この内、底部から遺存するものについては頭に丸括りで段数を示し、口縁の遺存するものについては頭に口の字を付す（第1段：①など）。段高の計測方法は凸帯稜を基準とする。器径の欄には、口径から底部の順に示す。器厚の欄には、上の段から順番に各段の器厚を示し、計測点は段の中位とする。
- 4 胎土：含有する砂礫の粒の大小（A類：小礫細砂、B類：小礫粗砂）と含有量の程度を記す。肉眼観察による鉱物の種類はG：花崗岩、V：緑色変質火山岩類（グリーンタフ）、S：石英、H：白色軟色粒子、O：酸化鉄粒子、U：雲母、T：長石、K：角閃石の略号で記す。（）内は本墳の墓輪の特徴であるG、Vの比率を示した。
- 5 焼成：良否・堅軟の程度をa：良好・極堅緻、b：良好・堅緻、c：やや軟質に分けて記す。全て窯窓焼成である。
- 6 色調：全体の大部分を占めている色調を「標準土色帖（1990年度版）」（農林水産省技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所監修）に基づいて記す。1：5YR橙6/6、2：5YR橙7/8、3：5YR橙6/8、4：7.5YR橙6/6、6：7.5YRにぼい橙6/4、7：5YR明赤褐5/6、8：7.5YR明褐5/6、9：5YR灰4/1。
- 7 口縁：断面の形態によって短く外反するA類、直線的に開くB類、直立気味（輪積み痕明顯）のC類、内湾気味のD類に大別した（図III-1）。A類は端部が水平なa1類、水平で外縁部突出するa2類、外傾するb1類、外傾し外縁部突出するb2類、B類は端部が水平なa1類、C類は端部が水平なa1類、外傾し外縁部丸みをもつ3類、D類は端部が水平で外縁部丸みをもつa3類に分けられる。内外のナデ幅を記した。端部はヨコナデ調整により上端面が凹むことがある。朝顔形については外反するA類があり、端部が垂直で外縁部突出するa1類と外傾し外縁部丸みをもつa2類に分けられる。
- 8 凸帯：断面の形状により、三角形を呈し突出度の強いA1類、三角形を呈し下辺部に丸みをもつA2類、三角形を呈し突出度の弱いA3類、台形状を呈すB類に分けられる（図III-2）。計測値は凸帯高/凸帯幅を示す。
- 9 透孔：原則として2孔一対で、隔段では直交してあけられている。形状は円形が大半で、横長椭円形もある。
- 10 外面・内面調整：（外面）ハケ調整手法の細別⁽¹⁾（図III-3）及びその幅を示す。（内面）整形用指頭



III-1 円筒埴輪口縁部分類図



III-2 円筒埴輪凸帯分類図



III-3 B種ヨコハケの細分

ナデ：A 1類、指ナデ調整 A 2類、整形用ハケメ：B 1類、調整用ハケメ：B 2類、板ナデ：C 類に分けられる。

11 備考：凸帯設定技法、凸帯裏面調整、基部調整、底面の捺圧痕の有無などを記す。

凸帯設定技法（①）：凸帯を製作する際に設定箇所を示す技法で、棒状工具による沈線 1 条：A 類、ヘラ状工具による沈線 1 条：B 1 類、ヘラ状工具による沈線 2 条：B 2 類、竹管状工具による沈線 2 条：C 類が見られる。（ ）内の数値は、沈線の幅を示す。凸帯裏面調整（②）：凸帯製作時に内面に残る指頭押圧：A 類、ヨコナデ調整：B 類、粘土貼付：C 類がある。基部調整（③）：基部製作時の調整であり、ヨコハケ A 類、指押圧：B 類、布ナデ：C 類、板ナデ：D 類がある。底面の捺圧痕の有無を記す。

③ 墓輪の特徴

今回の調査で出土した墓輪はすべて破片資料で形態・法量など不明確な点が多いため、三殊町教育委員会の調査で出土した墓輪との対応関係を考慮し、大塚古墳出土の墓輪の特徴を捉えてみたい⁽¹¹⁾。

1) 円筒墓輪 形態は凸帯が 4 条で 5 段構成が基本である。法量は口縁部径 30cm 前後、底部径 20cm 前後、器高 60cm 前後の大型（I 類）と口縁部径 20~25cm 前後、底部径 15cm 前後の細型（II 類）に分類される。各段の長さは I・II 類ともに第 1 段（底部）11cm 前後、第 2・3・4 段 10cm 前後、I 類の第 5 段（口縁部）17cm 前後、II 類は不明である。胎土は花崗岩、緑色変質火山岩類（グリーンタフ）を多量に含む特徴をもつ。焼成は良好にして堅緻であり、色調は淡褐色、茶灰褐色などの橙褐色系が主体的で、いずれも無黒斑で窯窓焼成であり、須恵質の焼きはない。口縁部は断面・端面の形態により 8 類に细分され、短く外反して端部が外傾し外縁部の突出する A b 2 類と直線的に開き端部が水平な B a 1 類が主体的となる。端部は内外面に右廻りのヨコナデ調整を行い、外面 2.5cm 前後、内面 2.0cm 前後の幅を測る。凸帯は 1 次調整終了後に凸帯の貼り付け及び右廻りのヨコナデ調整を行っている。断面の形状により 4 分類され、台形状を呈す B 類が主体的となる。ヨコナデ調整が全体的に粗雑であり、凸帯の下辺が十分にナデ付けられていない例が多く、このことに起因してか一個体内において、複数の形態が認められる場合（11）がある。また、凸帯の離脱するものが多く、凸帯設定技法が剥離部分から観察でき、4 分類される。棒状工具による A 類、ヘラ状工具による B 1 類、竹管状工具による C 類が同比率で見られる。透孔は 2 次調整終了後に透孔の穿孔が行われている。形態は円形が主体的であるが、横長楕円形も見られ、正確に円形を意図して穿孔しているにいためか、あるいは上部の粘土の自重によって歪んだ結果と考えられる。穿孔部位は第 2 段と第 4 段にそれぞれ対向して一対ずつで、上下で 90° 方向を逮えている。穿孔方法・方向は右廻りに刀子穿孔後指ナデ調整される。赤色塗彩は遺存状況は悪いが器面調整・透孔穿孔後の整形最終段階で外面ならび口縁部内面にかけて赤彩される。外面調整は 1 次調整タテハケ、2 次調整 B 種ヨコハケ（一瀬氏分類）を基本とする。2 次調整は第 2 段～第 5 段（口縁部）に行われ、第 1 段は 1 次調整タテハケのみである。各部位の B 種ヨコハケの種類及び単位（本数／幅（cm）／止め間隔（cm））は口縁部が B a''（16/1.3/-）、B b-1''（15/5.4/-）、B d（23/6.0/5.6）（26～/7.4/4.9～5.5）となり、B d が主体的に認められるが、幅の狭いハケにより凸帯間を 2 周以上となるものが認められる。胴部は B c（99/6.0～/4.0）、B d（12～/4.9/3.2）（15/5.4/7.0～8.0）（24～/6.7/4.7）（28/5.2/4.8～6.4）があり、止め間隔 3.4～6.7cm の B d が主体的となる。内面調整はナデ調整、ハケメ調整が見られ、左廻りの右傾斜ナメナデが主体的であり、各乾燥単位を越えた調整が認められる。また、凸帯部の内面には指頭押圧、ヨコナデ調整、粘土貼付などの凸帯裏面調整が認められるものもある。底部（第 1 段）は幅 5.6～10.0cm 程の粘土板の両端を右廻りに接合して輪としている。57・59・67 は外面に部分的に粘土を貼り付けており、二重粘土板形成の可能性がある。基部調整には内外面にハケ、指押圧、板ナデが認められる。底面にはすべて捺圧痕が残存する。時期は外面調整等の諸要素により川西編年Ⅳ期に比定される。

2) 朝顔形墓輪 すべて小破片のため詳細は不明である。法量は 73 の頸頭径が（凸带上で）14.0cm を測る。形態は頸部で細くくびれた後に、口縁部下段が弓なりに強く外反しながら開き、その末端から再び口縁部上段が外反を強めながら開いて端部に至る形態を呈すと思われる。口縁部は A a 1・A a 2 類があり、端部は強いヨコナデ調整により上端面が凹んでいる。凸帯は頸部に A 1 類が見られる。調整は口縁部最終調整が外面ナメハケ、内面ヨコハケ、頸部（肩部）が外面木口状工具による横位調整、内面ナメナデである。胎土は良く精選され、焼成は堅緻であり、色調は茶灰褐色などの橙褐色系が主体的となる。

3) 器種不明埴輪

形態・調整等が異なる埴輪が僅かに出土している。75はA 3類凸帯で外面にナデ調整、76は歪みの強い破片で特に透孔は菱形に変形し、外面に多くの指紋、77は器厚が薄く、外面に細かいヨコハケ調整、78は内外面に非常に粗いヨコハケ調整、79は外面にヨコハケ調整後、繩文圧痕1条などが施され、形象埴輪を含む可能性がある。

(2) 武具類 (PL-16: 1~40, PL-17: 1~5)

武具類はいずれも前方部の掘削土から篩別によって出土したものである。

PL-16: 1~40は鉄製の小札。鋳化が著しく全て破片で原形をとどめず、長さは不明であるが、挂甲に付属する防具に関わる小札と思われる。幅は約1.8cmのものが主体的であり、38のように長さ7.0cm、幅3.0cmのもの(縫孔一列2個の円頭小札)も僅かに出土している。平成5年度に行われた三珠町教育委員会の調査では、前方部石室内に38のタイプが主体的に約556枚が遺存し、本来挂甲一領が副葬されていたと思われる。これらの小札は、形態的特徴より須恵器の型式観によればTK23併行期段階に比定されると考えられる。

PL-17: 1は鉄製の直刀。茎部の破片で、木質痕が認められる。現存長8.3cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm。

2~4は鉄鎌。2・3は刃部、4・5は茎部の破片で、鋳化が激しい。3は平造三角形式で、浅い脇抜を有し外反する。2も同形式の可能性が高い。

(3) 裝身具類 (PL-17: 1~6)

装身具類は武具類同様に前方部の掘削土から篩別によって出土したものである。

1~5は碧玉製の管玉。表面は滑らかで光沢があり、全て片側穿孔である。径0.7cm、長さ2.1cm内外のものが多いが、5のように濃緑色で径0.6cm、長さ1.4cmのやや小形のものも含まれている。いずれも孔内に朱の付着が認められる。

6は鉄製の環状を呈すが、鋳化が著しく、詳細は不明である。現存径2.7cm、現存厚0.5cm。

(4) 土器 (PL-17: 1~13)

土器は須恵器、弥生土器、土師器が出土している。

須恵器は前方部の掘削土から篩別により甕・高杯・罐・蓋杯・杯身が出土している。

1~6は甕である。1は口縁部で、2段の櫛描波状文の間に2条の回線が巡る。2~6は胴部の小破片で、形態的特徴は不明であるが、内外面の調整を観察すると外面平行タタキ、内面青海波文(2・3)、外面擬格子タタキ、内面青海波文(4)、外面擬格子タタキ、内面ナデによる磨り消し(5)、外面格子タタキ、内面青海波文(6)などが見られる。7は高杯の脚部で、短脚の三方向に長方形の透かしをもつものと思われる。8は小破片であるが罐の口縁部と思われる。外面に細振幅な櫛描波状文が施される。9は蓋杯で、口径10cmを測る。10・11は杯身で、9と対になろう。これらは、いずれも細片のためその時期を特定しにくいが、その形態的あるいは技術的特徴からみて、主体的なものはTK23型式の範疇に比定されると考えられる^[注1]。

弥生土器と土師器は第4トレンチで確認された竪穴遺構覆土内からそれぞれ壺が出土している。12は胴部で、外面に櫛齒状工具による条痕が施され、弥生時代中期の資料であろう。13は底部で、外面にハケ後丁寧なミガキ、内面にハケが施され、五領式の範疇に含まれるものである。いずれも破片であり、覆土(2層)中から出土しており、周辺から採土を行った際に混入し、マウント内に包含されたものが、崩壊に伴って周溝内に移動したと考えられるものである。

注1 B種ヨコハケについては一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修とともに発掘調査概要・V』 1988の細分案によっている。

注2 三珠町教育委員会の和田豊氏、佐野弘氏のご厚意により整理中の大塚古墳の出土資料を実見させて頂いた。

注3 須恵器については、おもに田辺剛三「須恵器大成」 1981の研究に準拠している。

6まとめ

今回の調査は、墳丘測量図化による現況把握と周溝の調査によって、その構造を確認し、墳形・規模を確定すること及び出土遺物の検討から大塚古墳の編年的位置づけの精密さを計ることを企図し、実施した。その結果、

以下のような成果が得られた。

(1) 遺構の検討

① 周溝の規模・形状

規模は、比較的遺存状況の良好な第1トレンチ内の周溝を基にすると現状では幅約4m、深さ約60cmを測り、断面の角度は墳丘側では約40度、外側約45度と緩やかな傾斜で立上がる。「II 遺跡の環境」の項に記した小林氏及び三珠町教育委員会による調査では、周溝の幅は約1~3mと報告され、今回の調査で確認した幅より狭いものである。これは各調査地点の遺存状況による違いとともに、小林氏は遺構確認面の平面プランでの計測値であり、今回の調査で確認された周溝覆土上層（第2層）の平面確認に起因するものと思われる。また、後円端部の確認された幅50cm程のテラスは、墳端部の削平によることが町教委の調査で明らかにされた。

周溝の巡り方（形状）は、周溝の検出状況及び後円部東側の現地形により盾型を呈すと推定される（図III-4）。後円部東側は盛土採取のために墳丘が削平されている状況であるが、PL-2・3・18-2・3を観察すると本来は墳丘東側の大塚台地の頂点315mから少し下がった場所に築造されたことが捉えられる。すなわち、315m~313mまでの等高線は順次高度を下げるが、312.8m付近を変換としてラインが乱れている。これにより周溝が313mまでは及ばないことが考えられる。以上の結果は小林氏と町教委の調査結果とも一致する。推定図は、これらの調査結果をもとに作成したものである。

② 墳形・規模

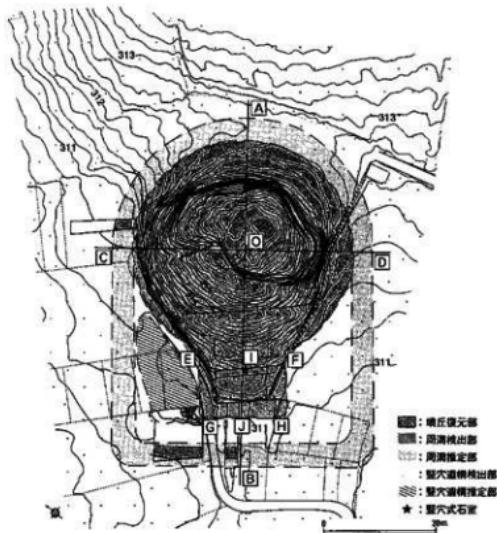
墳形は周溝の検出状況より帆立貝式古墳である。規模は調査事実にもとづき、事実関係の把握と復元のための要点を把握したものによると全長約61m（A-B）、後円部径約39m（C-D）、現存高6.0m、前方部主軸長10m（I-J）、くびれ部幅15m（E-F）、前方部先端幅15m（G-H）、現存高（主体部）1.0mを測ることが推定された。後円部の中心点は後円部の墳丘の北西斜面の等間隔に巡る等高線の遺存状況や町教委により確認された後円部の主体部の主軸をもとに位置を設定し、前方部の形状は第5トレンチの精査や町教委により確認された主体部の位置、墳頂部の葺石の検出状況から復元した。古墳の主軸は後円部と前方部が同軸上にのると考えられる。

③ 前方部の石室

前方部の石室は開墾による遺物の発見や第5トレンチの精査で存在の可能性が高まり、町教委の調査により後円部以外に竪穴式石室の存在が明らかにされるに至った。同様な例は全国に30前後確認されており、県内では帆立貝式の八代町孤塚古墳があり、二個の内部主体を持つ帆立貝式古墳の意義を改めて検討する必要があろう。

④ 竪穴遺構

竪穴遺構は第2トレンチ内に前方部前端の北西コーナーと考えられる葺石ラインに付随するように検出された。これは前方部の石室を意識した正面観を示唆するものと考えられ、今回の調査では確認できなかったが、対をなすように前方部墳端南側での存在も推定される。



III-4 大塚古墳周溝推定図

圖一五 山梨縣內出土埴輪觀察表

(2) 遺物の検討

B種ヨコハケ調整円筒填輪について

大塚古墳出土の円筒埴輪は川西編年Ⅳ期段階の外面2次調整B種ヨコハケ(Bc・Bd)があり、5世紀後葉に比定される。県内では八代町狐塚古墳、豊富村王塚古墳でも認められ、本県の5世紀後半段階の円筒埴輪のメルクマークとなっている。ここでは胴部以外のB種ヨコハケ調整の細分をもとに各古墳の位置づけを試みたい。

大塚古墳はB cとB dがあり、工具止め間隔3.4~6.7cmのB dが主体的、狐塚古墳⁽¹¹⁾はB cの工具止め間隔2.0~3.0cmが主体的、王塚古墳⁽¹²⁾は第2次タテハケとB cがあり、比率は不明である。一瀬和夫、若松良一両氏のB種ヨコハケの発展序列⁽¹³⁾に基づくと狐塚古墳、王塚古墳、大塚古墳の順序となる。いずれも僅かな破片資料による分析であるため、今後内面調整、形態変化（器高／第1段、器高／口縁部、器高／胴径）⁽¹⁴⁾、凸帯設定技法の有無、回転台の使用（鎌莊痕）などを踏まえ再度検討を行ってみたい。

(3) 本県における大塚古墳の位置づけ

① 墳輸出土古墳として

県内の埴輪を有する古墳は意外と少なく13基であり、これまでに橋本博文・坂本美夫の両氏により埴輪編年の大綱が提示され、詳細は『山梨県史資料編2』にまとめられている⁽¹⁾⁽²⁾。ここでは県内の埴輪の受容と展開を通して本古墳の位置づけを捉えてみたい。各古墳出土埴輪の諸特徴は観察表(表III-5)を参照されたい。初現期の埴輪出土古墳は笛吹川水系の銚子塚古墳、岡・銚子塚古墳、丸山塚古墳、富士川水系の大師東丹保古墳があり、主要水系単位に出現している。副葬品などから銚子塚古墳、岡・銚子塚古墳が4世紀後半、丸山塚古墳、大師東丹保古墳が5世紀初頭の築造と想定される。円筒埴輪は川西編年第II期に認定され、東日本の古式古墳としては畿内的な色彩の濃い古墳へ、いちはやく埴輪を樹立する背景には、畿内大和政権の大王権確立・伸長期の東海・中部・北関東への東国經營のための拠点確保政策の一端を察する。壺形埴輪のみを配する古墳は大師東丹保古墳以後、継続性は認められず、この時期のみに看取される古式な特徴として捉えられる。この埴輪受容期において円筒埴輪を主体とする埴輪祭祀と壺形埴輪を主体とする埴輪祭祀の相違が何を反映するかが問題となるが、首長の系譜あるいは畿内中枢部との関係における格差の反映ではないかと思われる。5世紀代(窯窯焼成技法の導入期)は川西編年Ⅲ期に認定される埴輪を樹立する古墳はいまだ知られていない。甲府盆地ではこの時期に一旦埴輪祭祀の途切れる現象があったことが指摘され、首長墓の規模の縮小化とも合わせて、甲府盆地中枢の在地支配の危機感を露呈するものと考えられる。5世紀中葉のブランクを経て、再び埴輪が受容されるのは、この地に窯窯焼成の技術がもたらされる川西編年Ⅳ期段階である。この5世紀後半には本古墳をはじめ、狐塚古墳、王塚古墳、表門神社古墳がある。石室の形態、副葬品、埴輪等から5世紀後半から6世紀初頭の築造と想定され、初期首長墓が形成された中道地域のほか、

盆地縁辺部のほぼ全城に古墳の築造が拡散し、4世紀前葉から続いた中道首長層の地位が丸山塚古墳被葬者を最後に低下し、ここに大きな政治的変動がみられる。川西編年Ⅲ期の埴輪をみると、Ⅳ期の埴輪の出現は、窖窯焼成という技術の受容とが期を一にしたことを示し、円筒埴輪の外面二次調整B種ヨコハケ技法の採用が畿内の埴輪工人の関与を窺わせ、人物埴輪、馬形埴輪等の形象埴輪の出現など、新たな埴輪祭祀を外部から受け入れた状況と対応するものである。この新来のB種ヨコハケの技法は本古墳や孤塚古墳、王塚古墳の3例を数えるに過ぎず、5世紀から6世紀初頭に位置づけられる表門神社古墳では認められず、広く普及することなく短命に終わり、6世紀以降では全く認められない状況である。6世紀代（埴輪樹立の普及）では莊塚古墳、秋山熊野神社古墳、オエン塚古墳、加牟那塚古墳、稻荷塚古墳があり、副葬品、埴輪等により莊塚古墳、秋山熊野神社古墳、オエン塚古墳は6世紀前葉、加牟那塚古墳は6世紀後半の築造と想定される。6世紀前葉から中葉にかけて初期横穴式石室が採用され、莊塚古墳、さらに加牟那塚古墳、など新たな首長層が台頭し、埴輪もこれらの中古墳に受容されていった。6世紀代の埴輪には円筒埴輪と形象埴輪が確認され、全体の形態のわかるものが多く、断片的な資料からの情報ではあるが、主な特徴としては円形の透孔が主体となり、外面調整は明確な二次調整が省略され、窖窯焼成によることが捉えられる。埴輪の終末は6世紀末葉に位置づけられ、稻荷塚古墳があり、6世紀中葉に埴輪祭祀が衰退した畿内の状況からも埴輪祭祀の変容が示唆される。

② 甲冑出土古墳として

県内の甲冑出土古墳は19基を数え、この内16基が曾根丘陵に分布する。しかし、大部分の古墳は消滅し、甲冑は散逸し、甲冑の種類・数量が特定できるのは6基のみである。以下県内の甲冑の受容と展開を通して本古墳の位置づけを捉えてみたい⁽⁴⁾。4世紀代の甲冑は中道町大丸山古墳から堅矧板革綴短甲が出土し、本例を含め京都府椿井大塚山古墳、大阪府紫金山古墳の3例に限られる。5世紀代の甲冑は本古墳をはじめ、中道町かんかん塚古墳、豊富村王塚古墳があり、いずれも5世紀後半段階である。本古墳は横矧板鉄留短甲（右前胸開閉式）1領、挂甲小札約600枚、かんかん塚古墳は横矧板鉄留短甲1領、鉄製小札99枚、青銅片6枚、頸甲片1枚、肩甲片3枚、金胴製小札1枚、王塚古墳は横矧板鉄留短甲（両胸開閉式）2領、眉庇付冑1、頸甲片数枚、青緞、挂甲小札数百枚が出土している。当該期の甲冑出土古墳は増加傾向にあり、円墳や帆立貝式古墳が主体的で、円墳が25m前後、帆立貝式古墳が60m前後の規模を測り、相前後する時期の古墳と群在し、東山古墳群のかんかん塚古墳と大丸山古墳例のように同一古墳群中に複数存在する場合もみられる。組合せは冑と甲を基本とし、頸甲や肩甲などの付属具が伴出する。副葬位置は武器類とともに石室内が支配的である。新たな甲冑保有層の出現は中央政権による軍事編成が広範に展開され、直接的な地方経営が開始されたことを示すものと考えられ、本古墳の大和政権との密接な関わりや武人的な性格を持つ被葬者の姿を彷彿とさせよう。6世紀代の甲冑は中道町稻荷塚古墳、同考古博物館構内古墳があり、円墳のみとなり規模は15~20mである。5世紀後半同様、群集墳中に存在するものと東山古墳群の稻荷塚古墳、考古博物館構内古墳例のように同一古墳群中に複数存在するものがみられる。組合せは小札だけの出土が多く、挂甲のみになると思われる。該期の本県の状況は「群程度の広がりを基盤とした小地域の首長や群集墳内に葬られるような有力家族層を中央政権が直接把握する形で軍事編成が進行したものとみられる」とされ⁽⁴⁾、後期を通じ前方後円墳が多数造営された関東との軍事編成の行わる方の違いが示されている。

註1 横木博文 「甲冑の円筒埴輪」『丘陵』第8号 1978 坂本美夫 「孤塚古墳の埴輪」『甲斐考古』18-1 1981
坂本美夫 「山梨県における五世紀前半代の埴輪」『甲斐考古』18-2 1981

註2 王塚古墳出土埴輪については農富村教育委員会の岡野秀典のご厚意により見せて頂いた。岡野秀典 「平成8年度大島居宇山平遺跡の調査」『平成7・8年度村内遺跡発掘調査報告書』 1997

註3 東国におけるB種ヨコハケ調整の細分と発現序列の検証により松良一氏が円筒埴輪の年代比定を行っており、参考にさせていただいた。若松良一「ヨコハケ調整円筒埴輪の技術的検討—その細分と発現序列—」『課題山35号墳の研究』 1987

註4 山崎 武 「埼玉県の円筒埴輪の編年について」『埴輪研究会誌』第4号 2000

註5 保坂和博 「埴輪」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』 1999

註6 保坂和博 「武具」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』 1999

註7 海沢 誠 「東海・中部高地・関東・東北地方における甲冑出土古墳」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』 1993

参考文献

川西宏志 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978

赤坂次郎他 「コナベ古墳前方部南外堤発掘調査報告」 1980

森田克行他 「新池」 1993

付篇 伊勢塚古墳の調査

1 調査の概要

経 過

伊勢塚古墳の調査は、大塚古墳と同様、当初は航空写真測量による墳丘図化及びトレンチ調査における墳丘規模の確認作業を行う予定であったが、予算の都合上、前者のみの実施となり、経過は以下のとおりである。

平成6（1994）年2月28日にトレンチを2ヶ所設定したが確認作業には及ばず、3月1日に航空写真による測量図化を実施し調査を終了した。

2 遺跡の環境

(1) 位 置

伊勢塚古墳は、曾根丘陵西端の甲府盆地を見おろす大塚台地上、標高316mに所在する。本古墳の南西300mに大塚古墳が位置する。また大塚古墳との中間には中塚と呼ばれる古墳があり、提瓶・金環・勾玉などが出土地と伝えられるが、現在墳丘はほとんど遺存していない状況である。

(2) これまでの報告

伊勢塚古墳は今回の調査以前に報告・調査が行われており、その概要は以下のとおりである。

① 昭和初期の仁科義男氏の報告^(注1)

仁科氏の報告では伊勢塚古墳は、北原古墳群の第3号墳として以下のように記述されている。

「第3号墳（伊勢塚）円墳 前項に記するが如く、中塚を南方に去る百米程の所にあって、完全なる原形を保有するもので、封土上には針葉・潤葉の二十幾本かが繁茂していかにも壯麗な外観を呈して、頂点は幾分割削されて伊勢大神の石祠が建てられている。苔石・環溝・埴輪等外部施設は施されていない。伊勢社の参道として封土の南側に十数個の石段が設けられ、その五~六階登りし右方に巨大な石塊の露出せるは、あるいは主体たる石構の一部にはあらざるかと考えられる。基底径36.00m、頂点径14.00m、高さ8.00m。」

② 立正大学考古学研究室による調査^(注2)

昭和40年（1965）に立正大学考古学研究室により、測量調査が行われた。

なお、伝承によるとかつては横穴が開口しており、副葬品と思われるものが持ち出されたとされているが、その内容や所在については不明である。

(3) 現 状

現状での規模は、基底径36m、頂点径14m、高さ8mの円墳で、遺存状況は比較的良好である。仁科氏の報告にも見られた横穴式石室の一部と思われる大形の石は、現在も南東側から丘頂へ登る階段の脇に露出している状況である。

3 まとめ

今回の調査では、航空写真測量による墳丘図化のみに終止したため、周溝の解明に至らなかった点など、今後の課題として残された。北原古墳群はもとより曾根丘陵上の古墳の展開を明確にするために、改めて調査が行われることを期待するところである。

注1 仁科義男 「東八代郡豊富村及び大塚村古墳群の調査」『史蹟名勝天然記念物調査報告8』山梨県 1935

注2 板詰秀一 「山梨県下における崩壊残存する古墳の実測図作成について」『富士国立公園博物館研究報告』第14号 1965



第1図 伊勢塚古墳近景（左奥：大塚古墳）（西から）



第2図 伊勢塚古墳墳頂より大塚古墳を望む（西から）



第3図 伊勢塚古墳測量図

《捕 赏》

固 定 部 位	固 定 部 寸 寸	部 位 法 寸 (cm)	地 土	地 色 調	口 縫		凸 縫		透 視 孔	外 面 調 整			内 面 調 整		備 考					
					分 類	テ ク ニ ク ニ テ ル 部 分	分 類	計 画 (cm)		外 部	内 部	口 縫 寸 寸	側 面 寸 寸	内 部 寸 寸						
10-1	b	○ ○	□(6.1) 32.6	L32.0 32.6	C30.5 1.4	A : 少量 S : O - U - K (V > G)	a	7	B a 1	3.0	2.0	B T	-/-2.0	○ ○ ○	B b = 1"	B d 7	(上部) (下部) B 2 B 2 A 2 A 2 B 1 - B 1	①: A (0.3cm) ②: C		
10-2	*	○ ○	□(6.2) 32.4	L32.4 32.4	L31.1 1.4	B : 少量 S : (V : G)	a	3	A b 1	3.5	2.0	B	0.7/-1.0	○ ○ ○	B d	S 5	A 2	A 1		
10-3	b	○ ○	□(6.3) 32.4	L32.6 32.4	C30.5 1.4	A : 少量 S : O - U - K (V : G)	b	1	D b 3	1.7	1.5	B	1.1/-2.0 -/-2.0	○	B b = 1"	B d 7	B 1 A 2 B 1 A 2	③: A (0.5cm) ④: C		
10-4	*	○ ○	□(6.3) 22.2	L24.6 22.2	C30.5 1.4	B : 少量 S : O - K (V > G)	b	5	C 2 x 1	1.9	1.5	B T	-/-1.8	○ ○ ○	B b = 1"		B 2 A 2	⑤: A (0.4cm)		
10-5	b	○	□ (8.9)	□(28.0)	L31.3	A : 少量 S : O (V)	b	5	A x 2	2.7	1.5					B d	4.9	A 2		
10-6	*	○	□ (10.1)	L28.0	C31.0	B : 少量 S : O (V : G)	b	5	A b 1	2.2	1.8					B d	5.4	A 2		
10-7	b	○	□ (10.6)	L28.0	L31.1	B : 少量 S : O (V)	c	7	C 2 b 3	2.7	1.7			○ ○	B b = 1"		A 1 B 2			
10-8	b	○	□ (12.0)	L32.7	L31.1	A : 少量 S : O - K (V : G)	b	7	B a 1	2.5	2.5			○	B a "		A 1 B 2			
11-9	*	○	8.2 (4.3)	24.0 32.2	1.2 1.4	B : 少量 S : O (V > G)	c	3				A 1 A 1	1.2/-1.5 1.3/-1.8	○ ○		B d	3.4	B 1 A 2		
11-10	*	○	(7.2) (5.5)	24.5 24.7	1.2 1.5	B : 少量 S : O (V > G)	c	3				B B	0.9/-1.9 0.9/-2.4	○ ○		B d	6.7	B 2 A 2	砂利下に接して 2 重の凹溝が見 られ(?) H 3 と想われる	
11-11	b	○ ○	(10.3) (2.1)	25.8 22.4	1.2 1.5	A : 少量 S : O (V > G)	a	4				B B B B	1.1/-1.9 1.2/-2.0 1.2/-2.0 1.2/-2.0	○ ○ ○	B b = 1"	B d 7	(上部) (下部) B 2 B 2 A 2 A 2 B 1 - B 1	⑥: A (0.4cm)		
11-12	b	○	(1.0) (7.2)	23.0	1.8	A : 少量 S : O (V)	b	6				B T	-/-2.2	○		B d	4.8	A 2	⑦: A (0.4cm)	
11-13	*	○	(0.7) (1.4)	20.0	1.7 1.9	B : 少量 S : O (V)	b	7				B	1.0/-1.8	○		B d		A 2	⑧: A	
11-14	*	○	(0.0) (0.4)	23.8	1.1 1.4	B : 少量 S : O - K (V : G)	b	7				B	0.8/-2.2	○		B d	5.2	A 2	⑨: A	
11-15	*	○ ○	(0.9) (0.0)	24.6	1.2	B : 少量 S : O (V > G)	c	3				A T	-/-1.8	○	B a "		(上部) (下部) B 2 B 1 A 2	⑩: A (0.3cm)		
11-16	b	○	(0.4) (0.5)	25.4 25.5	1.2 1.4	B : 少量 S : O (V > G)	c	3				B T B T	-/-2.2 -/-2.2	○		B d 7		B 1 A 2	⑪: C (0.3cm)	
12-17	b	○	(4.6) (1.2)	22.8	1.7	B : 少量 S : O (V : G)	a	8				B	0.7/-2.1	○ ○		B d	5.8	A 2	⑫: H	
12-18	b	○	(3.1) (0.4)	27.8	1.4	A : 少量 S : O - K (V > G)	e	5				B T	-/-1.8	○		B d 7		R 1 A 1	⑬: C (0.3cm) ⑭: C	
12-19	b	○	(7.5) (0.9)	27.4	1.2 1.4	B : 少量 S : O - K (V : G (大 きい))	b	5				A 1	0.9/-1.4			B d 7		A 2 C		
12-20	b	○	(0.7) (4.7)	23.0	1.6	B : 少量 S : O (V)	b	5				B	0.9/-2.2			B d	4.8	A 2	⑮: A (0.5cm)	
12-21	*	○	(10.6)	23.4	1.2	B : 少量 S : O - K (V : G)	b	1				B	0.8/-2.1			B d	4.7	A 2		
12-22	b	○	既成13.0	24.0	1.6	B : 少量 S : O (V : G)	b	5				A 1 T	-/-1.4			B e	4.0	A 2 B 2	⑯: H 1 (0.4cm) 外壁にへこみ がある。また、窓枠の内側に砂利がある。 また、内壁に砂利がある。	
12-23	*	○	□ (4.2)	L31.0	B : 少量 S : O (V)	b	5	A b 2	2.3	1.9					B T			A 2		
12-24	*	○	□ (5.2)	L31.0	B : 少量 S : O (V : G)	b	7	A b 2	2.5	1.6					B T			A 2		
12-25	*	○	□ (6.8)	L31.1	B : 少量 S : O (V > G)	a	3	A b 2	2.4	1.8				○	B b = 1"		B 2 A 2			
12-26	*	○	□ (6.8)	L31.2	B : 少量 S : O - U - K (V)	a	7	A b 2	2.7	1.5					B a "		A 1 C			
12-27	*	○	□ (4.2)	L31.2	B : 少量 S : O - U - K (V)	a	7	A b 2	不規	1.4					B a "		A 1 C			
12-28	b	○	□ (5.0)	L31.0	B : 少量 S : O - K (V : G)	b	1	B a 1	2.1	2.0				○	B a "		B 2			
12-29	b	○	□ (7.2)	L30.8	B : 少量 S : O (V > G)	a	1	B a 1	2.5	1.8				○	B a "		A 1 B 2			

別表 道物一覽表

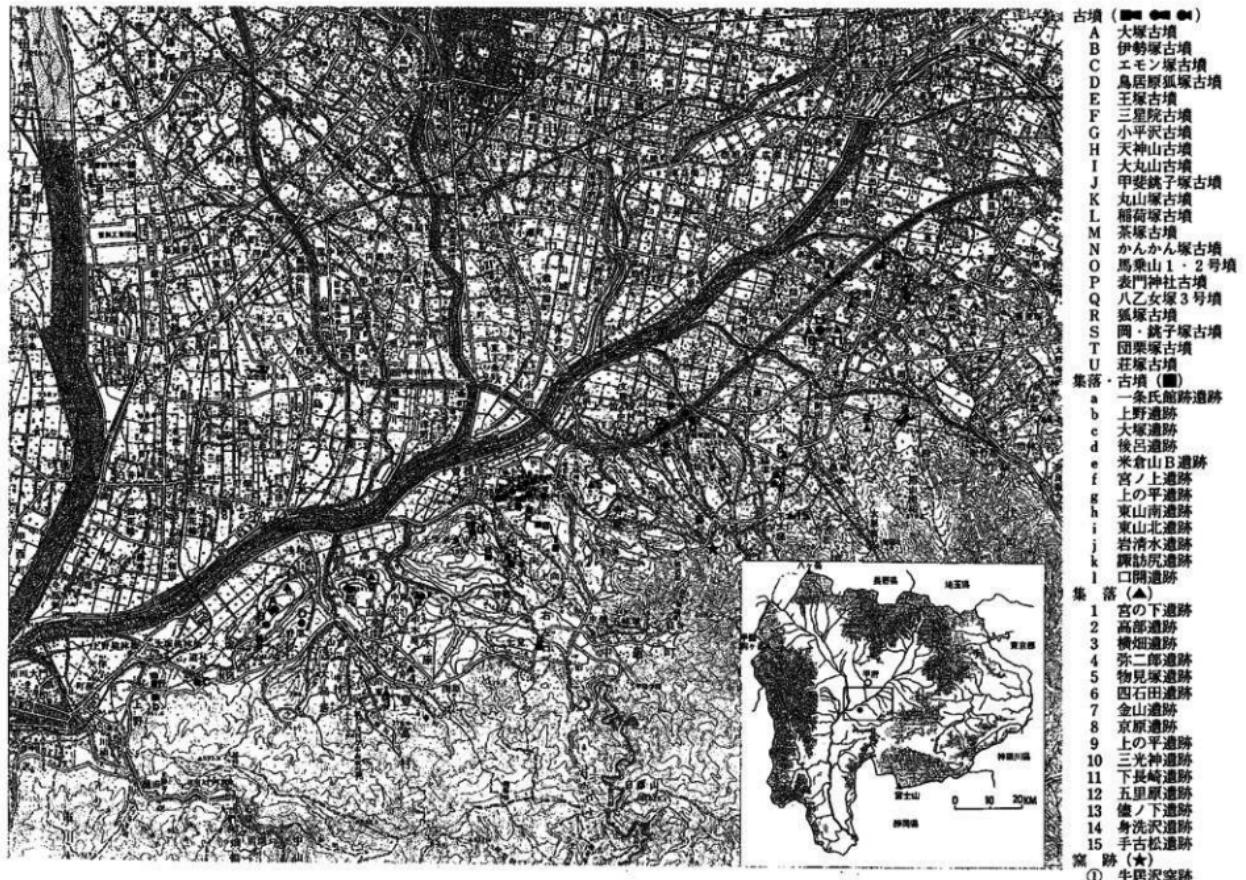
回 数 序 号	器 種	小 部 位	法 規 (m)			粉 土	成 分	色 調	口 縁		凸 起	透 通 孔	ベンツラ 外 内		外 面 調 整		内 面 調 整		口 縫 制 度 分 類	制 度 分 類	備 考				
			口 幅	高 さ	厚 さ				分 類	分 類			ナ メ テ リ ア メ ト リ ア ム ス ル 内 外	計 画 (ca)	外 縫 幅	内 縫 幅	明 照 度	内 縫 幅	外 縫 幅	明 照 度					
			口 幅	高 さ	厚 さ				分 類	分 類			ナ メ テ リ ア メ ト リ ア ム ス ル 内 外	計 画 (ca)	外 縫 幅	内 縫 幅	明 照 度	内 縫 幅	外 縫 幅	明 照 度					
12-30	b	○	□ (8.2)			C10.0	A : 多 量 S : O - K (V : G)	b 1	B + I	2.1	1.8			○	B a"						A 1 B 2				
12-31	b	○	□ (16.0)			C10.0	A : 多 量 S : O - K (V : G)	b 1	B + I	2.6	2.0			○	B a"						A 1 B 2				
13-32	b'	○	□ (6.0)			C10.0	A : 少 量 S : O - K (V : G)	a 5	C 2 b 3	2.9	1.8			○ ○	B ?						B 2				
13-33	b'	○	□ (12.2)			C10.3	A : 多 量 S : O - K (V : G)	b 5	A + I	2.9	1.5					B 4	5.5					A 2			
13-34	b	○	□ (12.2)			C10.8	A : 少 量 S : O - K (V)	a 5	B + I	2.3	1.9			○ ○	B b - I"						B 1 B 2				
13-35	a'	○	規則3.2	1.2	1.2	S (V > G)	b 7					A 2	0.9/1.9	○			B ?						A 2		
13-36	a'	○	規則5.2	1.2	1.2	S : O (V : G)	b 7					A 2	0.7/2.6	○			B a ?						A 2		
13-37	a' ○ ○		規則9.0	1.2	1.4	S : O - U - K (G)	b 2					B ?	-/-1.2	○		B a"						A 2	(D : A (0.3cm))		
13-38	a	○	規則3.4	1.2	1.2	S (V > G)	b 1					B ?	-/-1.6	○ ○			B a ?						B 1 A 2	(D : A (0.4cm))	
13-39	b' ○ ○		(7.0) (6.6)	1.4	1.4	S : O - D (V : G)	b 8					B	0.8/2.3	○		B d	B d	5.5				A 2	(D : B 1 (0.3cm))		
13-40	b'	○	規則9.0	1.4	1.6	S : O - D (V : G)	b 6					B	-/-1.7	○		B d	B d	6.4				A 2	(D : B 1 (0.6cm))		
13-41	b'	○	(8.0) (4.6)	1.6	1.4	S : O (V > G)	b 1					A 2	1.0/1.5	○ ○ ○			B a ?						B 1 A 2		
13-42	b	○	規則4.6	1.2	1.2	S : O - D (V > G)	b 4					B	0.7/2.2	○			B a ?						A 2		
13-43	a'	○	規則2.2	1.2	1.2	S : O (V > G)	b 1					B	0.7/1.5				B ?						A 2		
13-44	a	○	規則3.4	1.4	1.4	S : O (V : G)	b 7					A 1	1.0/1.7				B ?						A 2		
13-45	a	○	(2.2) (4.6)	1.2	1.2	S : O (V > G)	b 5					A 2	0.8/1.6				B ?						B 1 A 2		
13-46	b	○	(15.5) (4.2)	1.2	1.2	S : O - K (V > G)	b 6					B	0.7/1.8				B d						A 2	(D : C (0.8cm))	
13-47	a	○	(2.1) (3.1)	1.2	1.2	S : O - K (V > G)	b 1					B	0.8/1.7				B d	5.7					A 2		
13-48	a	○	(2.1) (1.1)	1.2	1.2	S : 多量 S : O (V > G)	b 7					B	0.9/2.3				B ?						A 2		
14-49	a	○	規則4.0	1.2	1.2	S : O - K (V : G)	b 1								B a"						A 2 C				
14-50	a	○	規則4.4	1.0	1.0	S : 多量 S : O - K (V : G)	b 1										B d	4.2					A 2		
14-51	a	○	規則4.8	1.1	1.1	S : 多量 S : O - K (V > G)	b 5									B d	5.9					B 1			
14-52	b	○	規則7.7	1.1	1.1	S : 多量 S : O - K (V > G)	b 5								B a"						A 1 B 2				
14-53	b'	○	規則6.8	1.3	1.3	A : 多量 S : O (V > G)	b 1							○	B b - I"						A 2				
14-54	a	○	規則7.4	1.0	1.0	S : 多量 S : O (V > G)	b 7									B d						A 2			
14-55	a'	○	規則7.4	1.7	1.7	S : 多量 S : O (V > G)	b 3															テテハケ	B 1 A 2		
14-56	b	○	規則6.2	1.8	1.8	A : 多量 S : O (V > G)	b 5															テテハケ	A 2	内側に①と記載される2箇所の透 明部が見られる。	
14-57	b	○	① (6.6)	規則6.6	① (1.0)	A : 多量 S : O (V > G)	b 1															テテハケ	A 2	透明部: 2箇所、基準面より下側の(A-1), 上側に透明部がある。	
14-58	a	○	① (5.8)	規則6.6	② (2.3)	A : 多量 S : O (V > G)	b 7															テテハケ	A 2	透明部: 2箇所、D. (内側) B. (外側) に透明部がある。	
14-59	b	○	① (7.3)	規則6.0	① (1.3)	A : 多量 S : O (V : G)	b 5															テテハケ	—	透明部: 2箇所、基準面より下側の(B-1), 上側に透明部がある。	

C152	番 種	分 類	部 位	出 量 (cm)				地 土	模 式 色 調	II 球		凸 形		ベンガラ 透 孔 外 内	外 出 調 査	内 面 調 査	備 考
				口 明 底	器 高	底 径	器 厚			分 類	ナ ダ 割 合 外 内	分 類	計 面 (cm)	口 絞 分 類	口 縁 分 類	外 縁 分 類	
14-80	内 筒	b	○	①11.4	15.22.6	⑩.1	0.5	△: O (V > G)	b 5.9			A 7			タテハケ		A 2 B 2
14-81		b	○	① (10.8)	16.0	⑩.2	0.5	△: O (G)	b 5						タテハケ		A 2
14-82		a	○	① (6.8)		⑩.5	0.5	△: O (V > G)	b 1						タテハケ		A 2 ○: (内面) A - 6.8 / 1.3cm
14-83		b'	○	① (6.4)		⑩.9	0.5	△: O (V : G)	b 7						タテハケ		A 2 ○: (内面) A - 6.4 / 1.3cm
14-84		a	○	① (6.4)		⑩.0	0.5	△: O (V : G)	b 1						タテハケ		A 2
14-85		b'	○	① (6.0)		⑩.6	0.5	△: O (V > G)	b 8						タテハケ		A 2 ○: (内面) B、底面に擦れ痕
14-86		a'	○	① (7.3)		⑩.2	0.5	△: O + U (V > G)	b 1						タテハケ		A 2 ○: (内面) A + B、底面に擦れ痕
15-87		e	○	① (6.8)		⑩.3	0.5	△: O (V : G)	b 7						タテハケ		-
15-88		b	○	① (6.4)		⑩.4	0.5	△: O (V > G)	b 5						タテハケ		A 2
15-89		c	○	② (2.0) ③ (0.9)		⑩.7 ⑩.4	0.5	△: O + K (V : G)	b 1			A 1	0.7 / 2.0		タテハケ		A 2 ○: (内面) B、底面に擦れ痕
15-70	内 桶	c'	○	□ (3.6)		□.3	△: O (V : G)	b 5	A + 1	2.5	1.0			○	ヒ 7		B 2
15-71		a'	○	L 1 (3.4)		L 1.1	△: O + K (V > G)	b 1	A + 2	2.5	1.5			○ ○	ヒ 7		B 2
15-72		a'	○	■ (3.2)		1.4	△: O (V > G)	b 1							タテハケ	■ (下部) A 2	
15-73		a	○	■ (1.5)	14.0	1.2	△: O (V > G)	b 5			A 1	1.2 / 2.7			ヒ 7	■ (上部) A 2	
15-74		a'	○	■ (2.4)		1.5	△: O (V > G)	b 4						タテハケ	■ (下部) A 2		
15-75		a'	○	■ (2.6)	1.9	△: O + U (V > G)	b 2			A 3	0.7 / 1.8	○		ヒ 7		A 2 ○: C	
15-76		b	○	■ (2.8)	2.0	△: O (V : G)	b 5					○			ヒ 7		A 2
15-77		a	○	■ (2.6)	1.2	△: O (V : G)	b 4							ヒ 7		A 2	
15-78		b'	○	■ (2.6)	1.8	△: O (V > G)	b 3							ヒ 7		B 2	
15-79		a	○	■ (2.8)	1.4	△: O (V : G)	b 4					○ ○		ヒ 7		B 1 A 2	

〈管 玉〉

図版番号	出土位置	長さ (mm)	直径 (mm)	孔径上／下 (mm)	重さ (g)	色調	備 考
17-1	前方部 (箇別中)	21.5	7.5	1.9 / 2.6	2.42	淡緑色	孔内に朱が見られる。
17-2	前方部 (箇別中)	21.0	7.0	2.0 / 2.5	1.75	淡緑色	孔内に朱が見られる。
17-3	前方部 (箇別中)	21.0	6.8	1.5 / 2.5	1.86	淡緑色	孔内に朱が見られる。
17-4	前方部 (箇別中)	20.0	7.0	2.0 / 3.0	1.94	淡緑色	孔内に朱が見られる。
17-5	前方部 (箇別中)	14.0	6.0	1.8 / 2.9	0.96	濃緑色	孔内に朱が見られる。

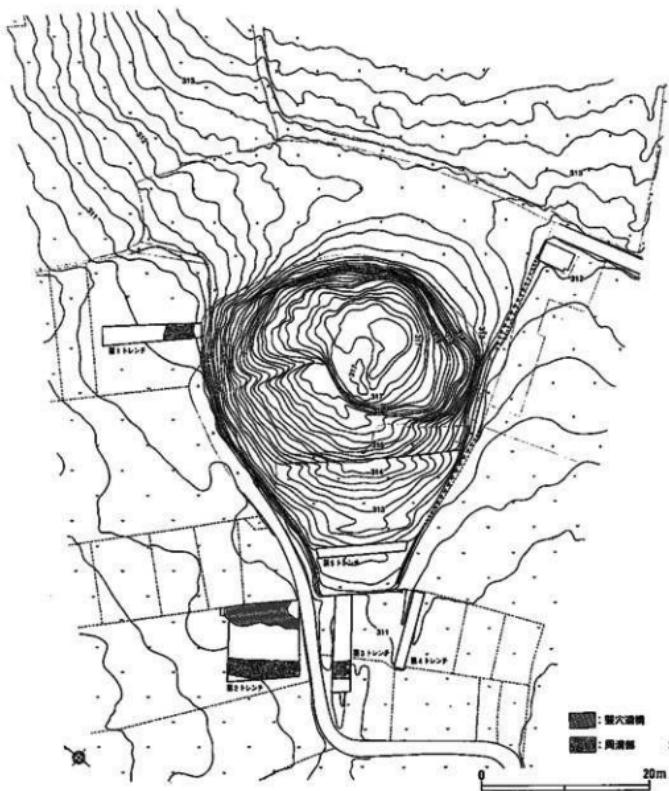
P L - 1 周辺の遺跡分布図



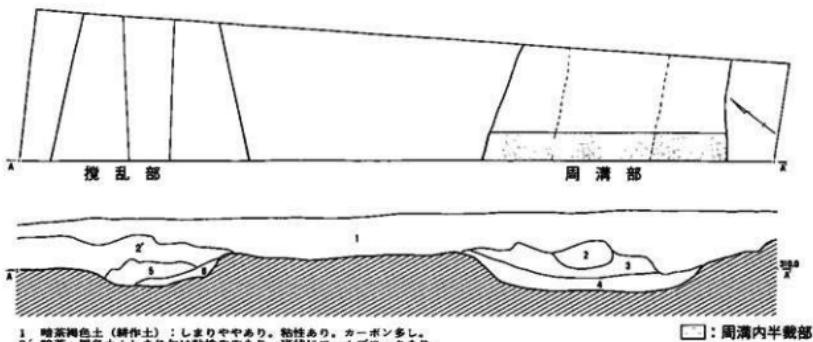
遺跡周辺の地形 PL-2



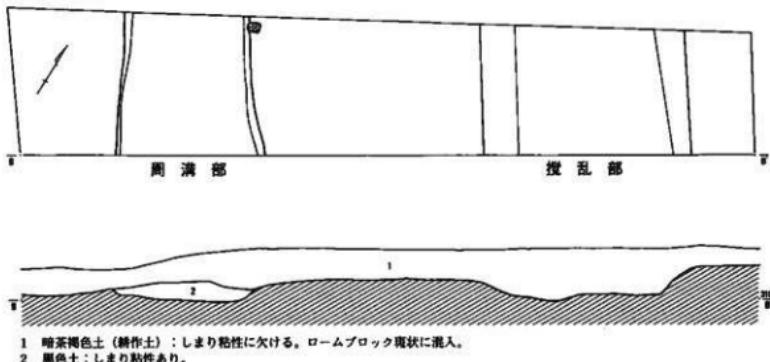
P L - 3 大塚古墳調査全体図



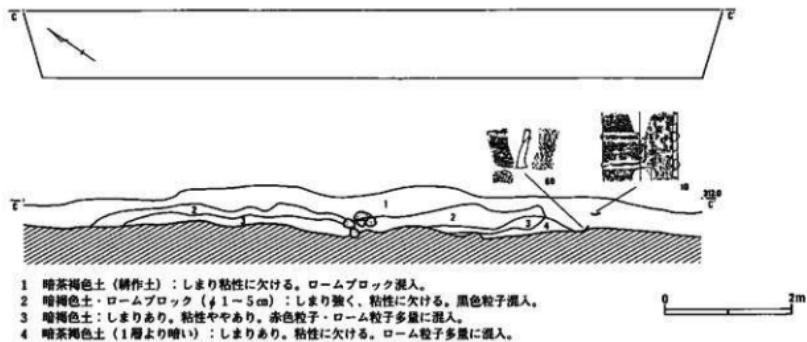
<第1トレンチ>



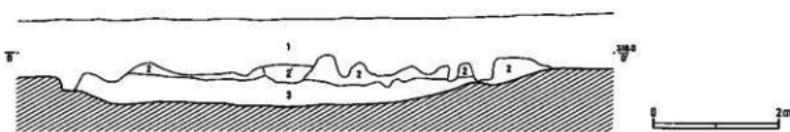
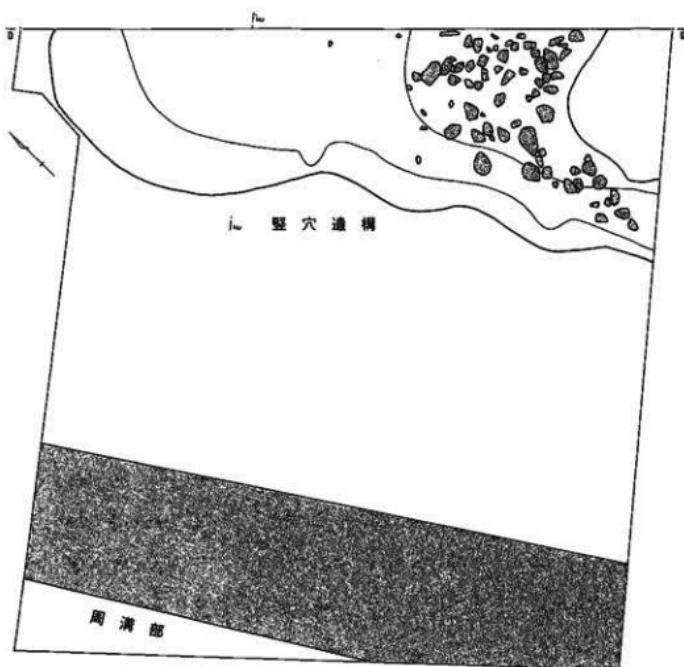
<第3トレンチ>

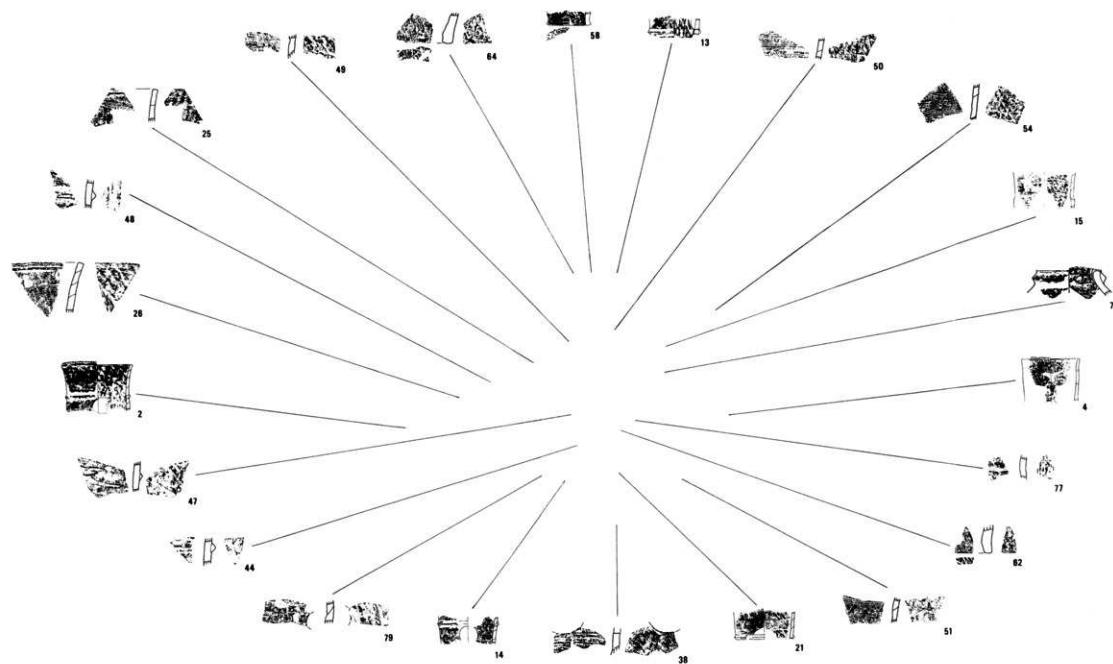


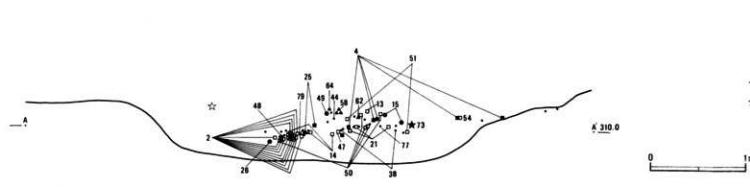
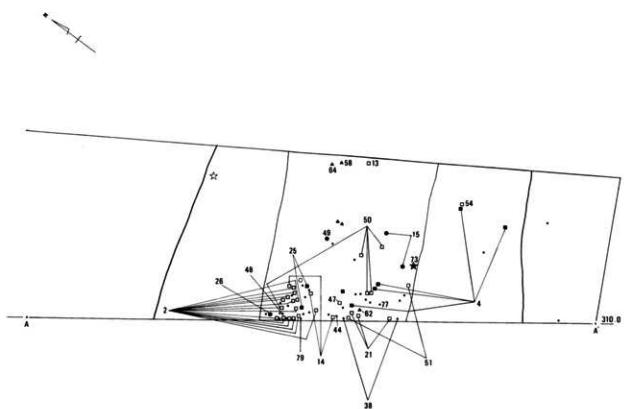
<第5トレンチ>



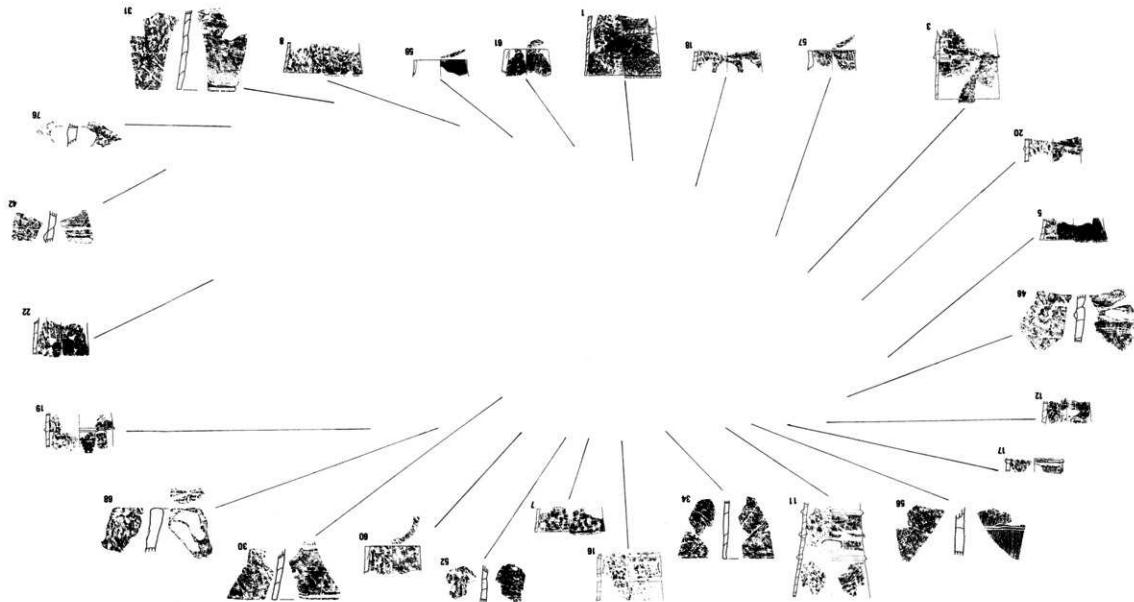
PL-5 第2トレンチ

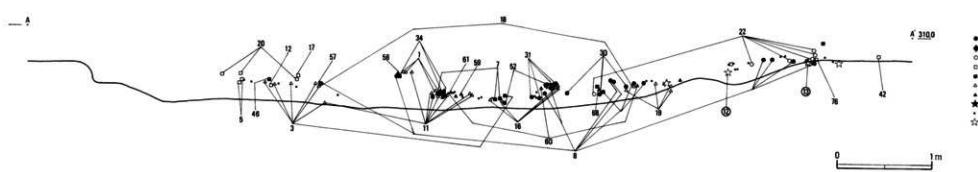
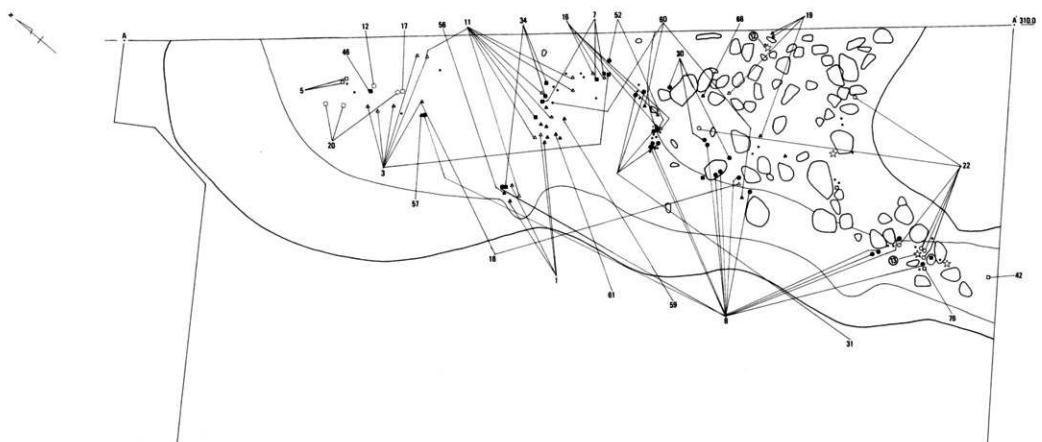




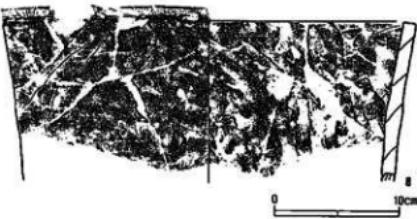
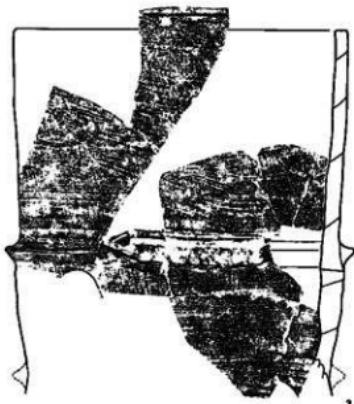
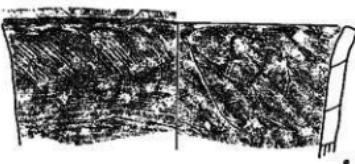
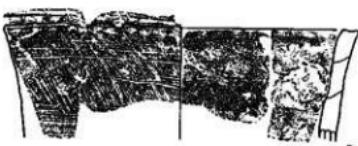
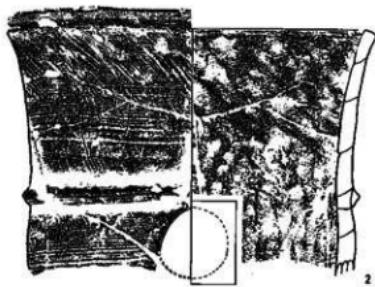
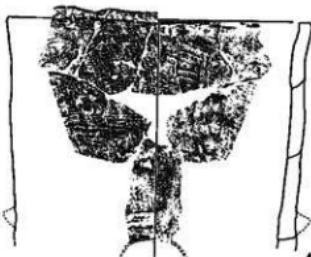
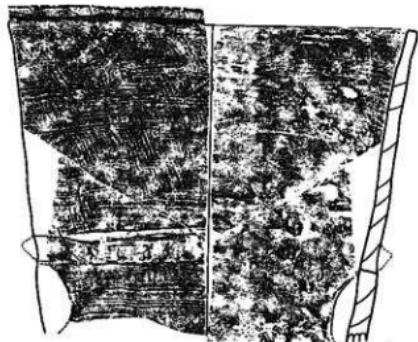


- : 円筒埴輪（外面調整：B a⁺）
- : 円筒埴輪（外面調整：B c⁻）
- : 円筒埴輪（外面調整：B d⁻）
- : 円筒埴輪（外面調整：B b-1⁺）
- △ : 円筒埴輪（外面調整：B d[?]）
- ▲ : 円筒埴輪（外面調整：1次タテハケ）
- ★ : 朝向形埴輪
- : 円筒埴輪（外面調整：不明）
- ☆ : 土 器

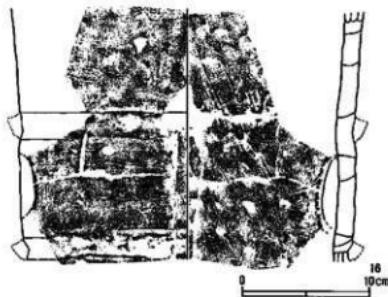
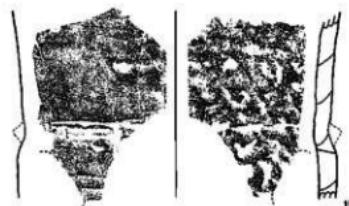
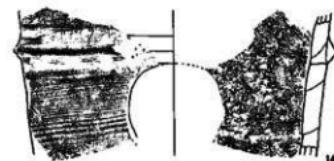
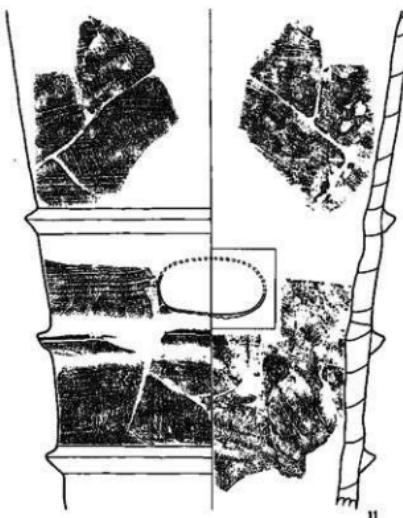
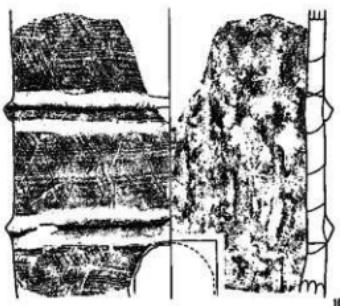
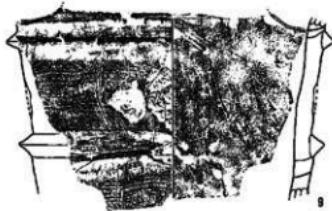


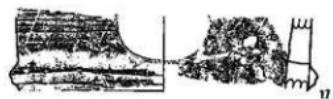


- ：円筒埴輪（外面調整：B a ”）
- ：円筒埴輪（外面調整：B c ”）
- ：円筒埴輪（外面調整：B d ”）
- ：円筒埴輪（外面調整：B b - 1 ”）
- △：円筒埴輪（外面調整：B d ? ”）
- ▲：円筒埴輪（1次タテハケ）
- ★：朝顔形埴輪
- ：円筒埴輪（外面調整：不明）
- ☆：土器

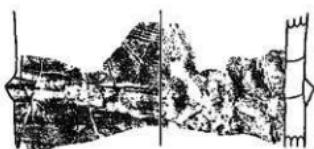


0 10cm

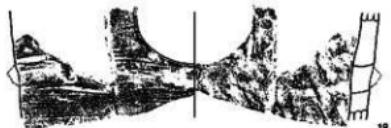




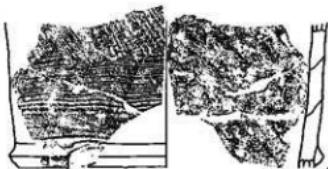
17



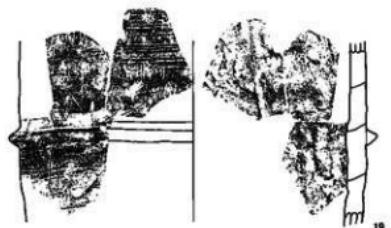
18



19



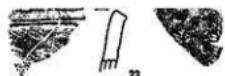
20



21



22



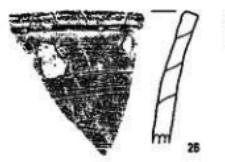
23



24



25



26



27



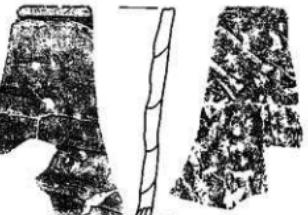
28



29

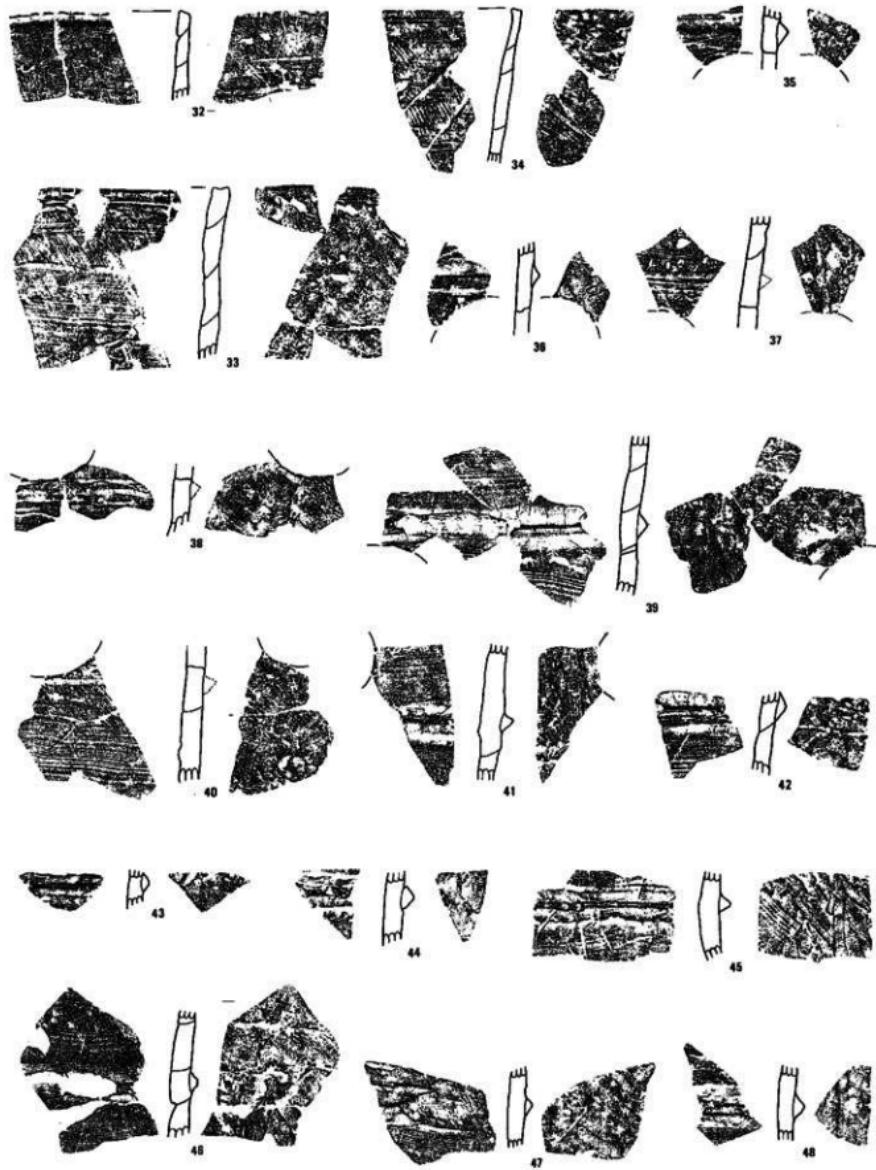


30

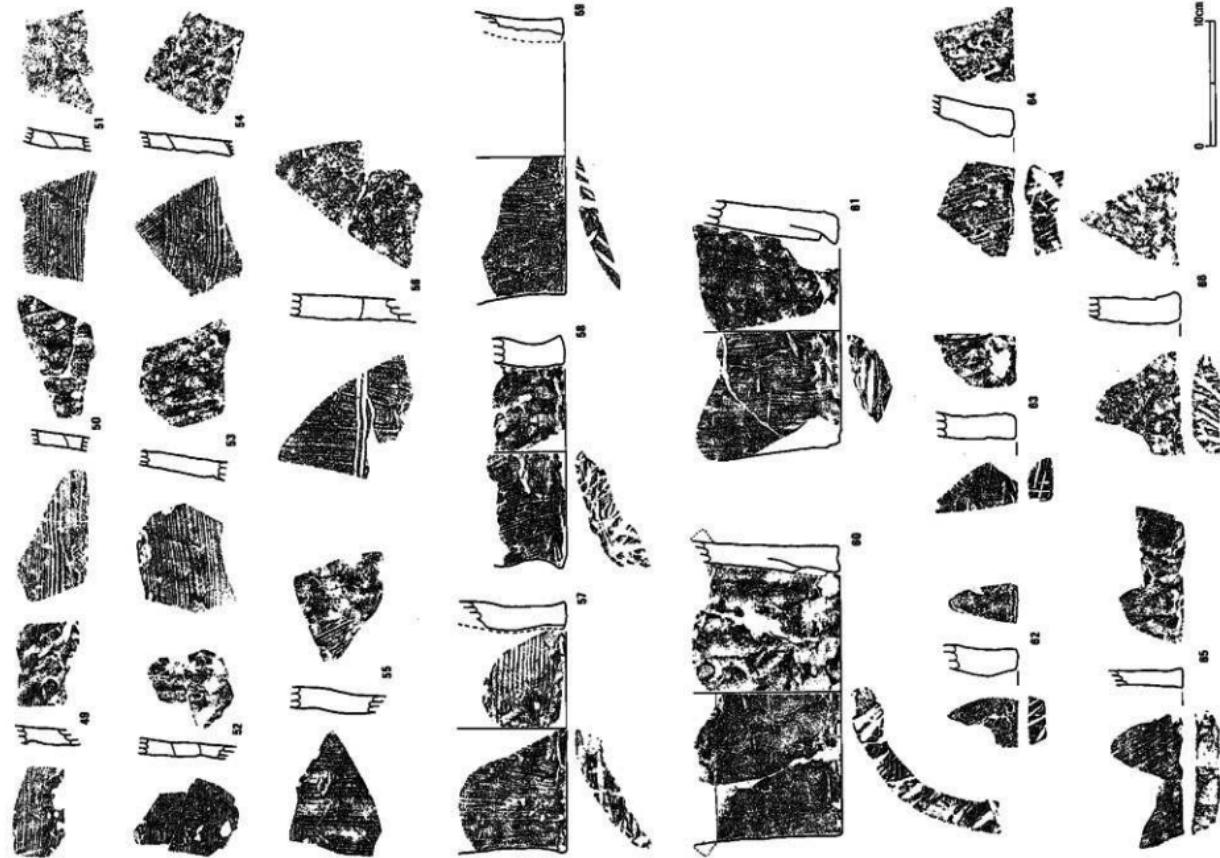


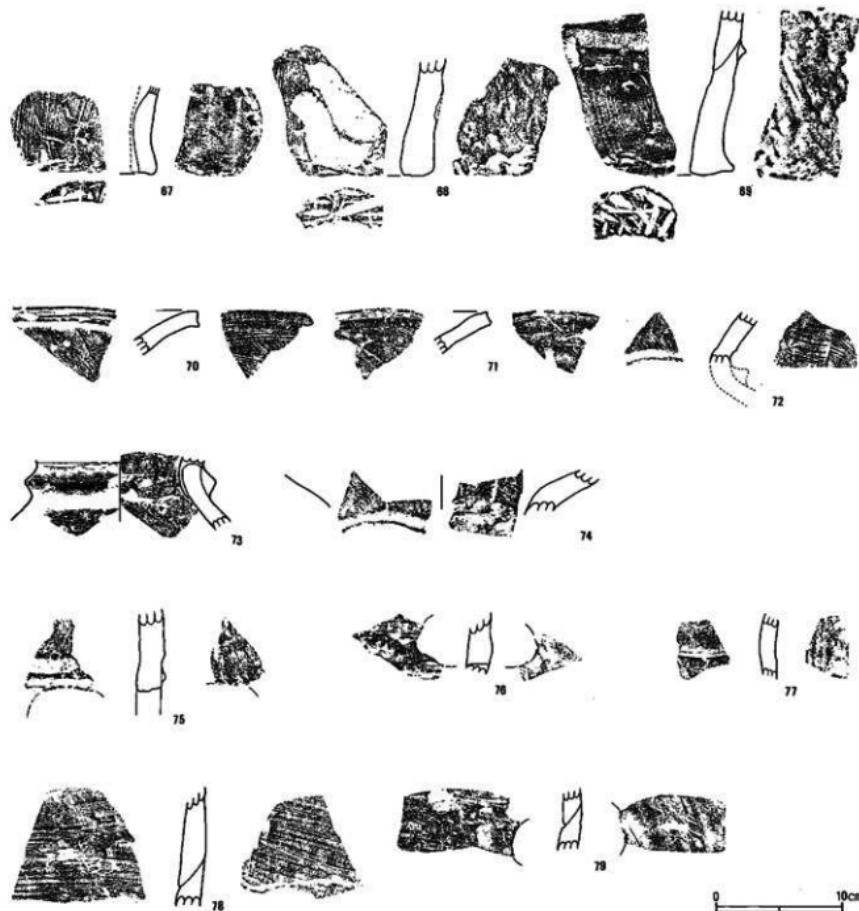
31

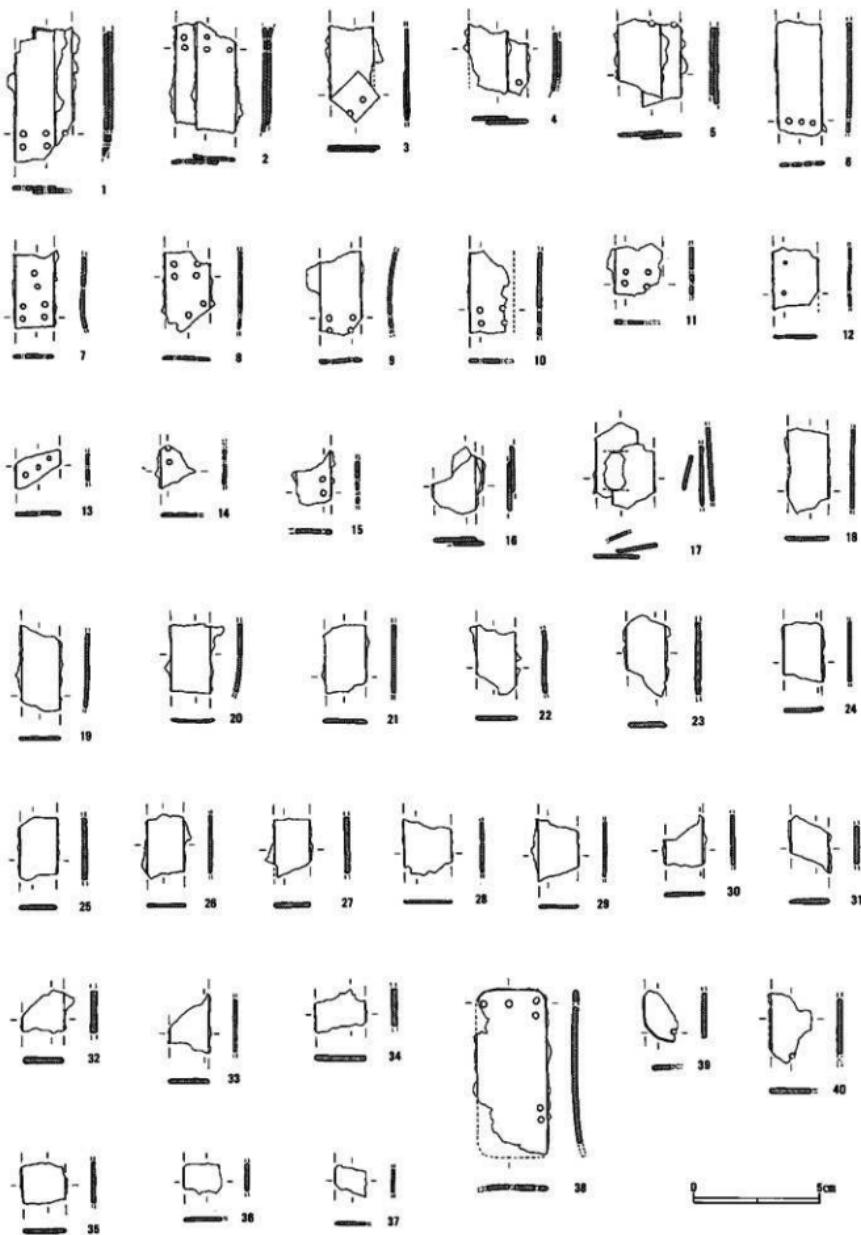
0 10cm



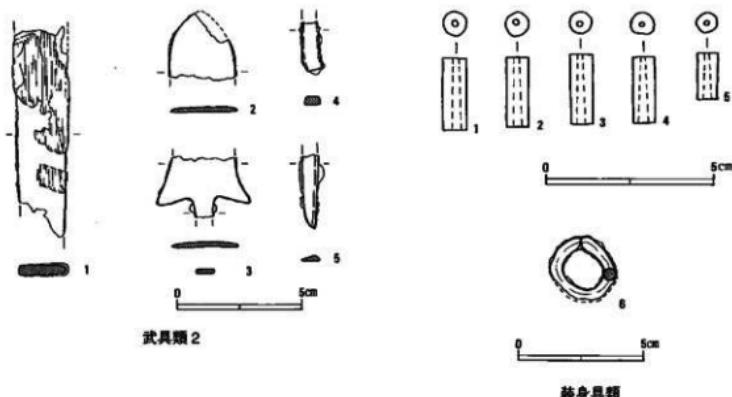
0 10cm







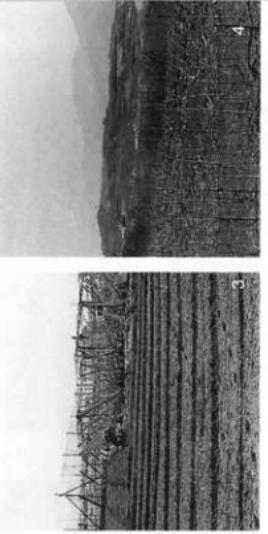
PL-17 武具類 2 裝身具類 土器



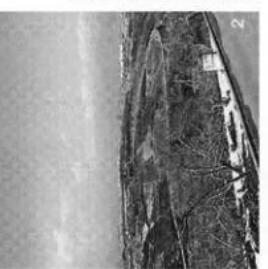
土 器



1 遺跡遠影(南から)



2 墓丘部東側(大塚台地頂部付近)



3 墓丘部東側斜面状況



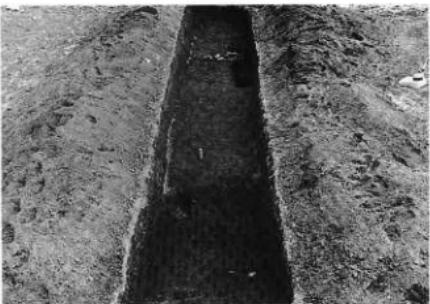
4 墓頂部より體高村王塚古墳を望む
前方部坂上に放置された葺石等

5 前方部坂上に放置された天井石
6 前方部坂上に放置された天井石

P L-19 第1トレンチ調査



7 調査風景（南から）



8 トレンチ完掘状況（北から）



9 周溝及び遺物・葺石検出状況（南から）



10 周溝検出状況（北から）



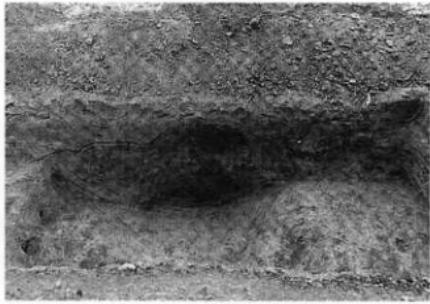
11 周溝断面（東から）



12 周溝内遺物・葺石出土状況（北から）



13 増丘端部検出状況（北から）



14 捣乱部検出状況（東から）



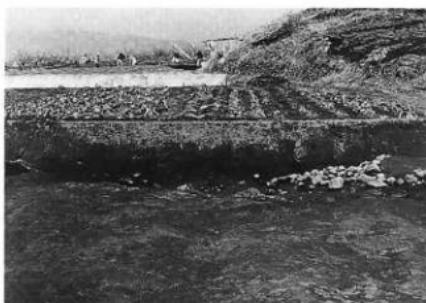
15 調査発景（南西から）



16 トレンチ完掘状況1（北西から）



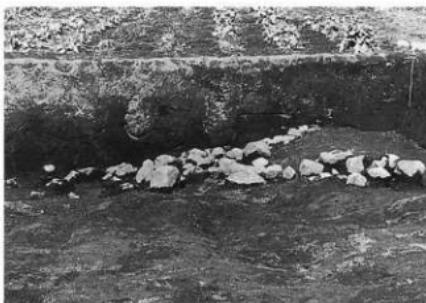
17 トレンチ完掘状況2（北から）



18 竪穴遺構断面（西から）



19 前方部埴端南西コーナー検出状況1（南から）



20 前方部埴端南西コーナー検出状況2（西から）



21 竪穴遺構内遺物出土状況1（東から）

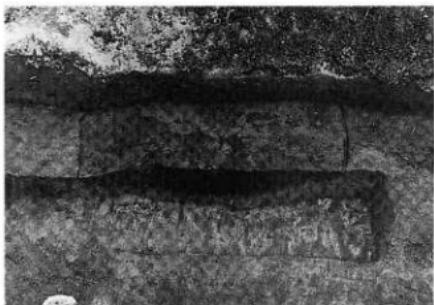


22 竪穴遺構内遺物出土状況2（東から）

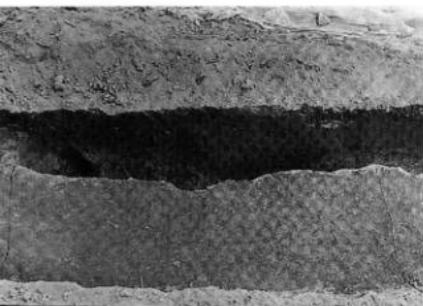
PL-21 第3・4・5トレンチ調査



23 第3トレンチ完掘状況（西から）



24 第3トレンチ周溝上断面（北から）



25 第3トレンチ搅乱部検出状況（北から）



26 第4トレンチ完掘状況（西から）



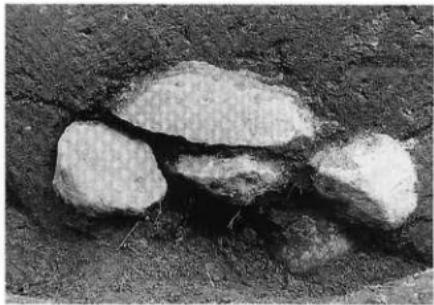
27 第5トレンチ精査前（南から）



28 第5トレンチ断面（南西から）



29 第5トレンチ壁群（石室）検出状況1（西から）



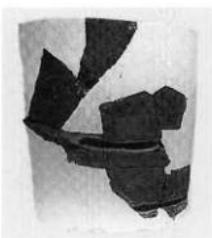
30 第5トレンチ壁群（石室）検出状況2（西から）



31 円筒埴輪11



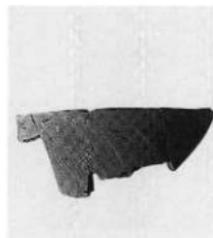
32 円筒埴輪2



33 円筒埴輪3



34 円筒埴輪1



35 円筒埴輪5



36 円筒埴輪6



37 円筒埴輪9



38 円筒埴輪10



39 円筒埴輪13



40 円筒埴輪15



41 円筒埴輪16



42 円筒埴輪17



43 円筒埴輪19



44 円筒埴輪20



45 円筒埴輪21



46 円筒埴輪22



47 円筒埴輪26



48 円筒埴輪31

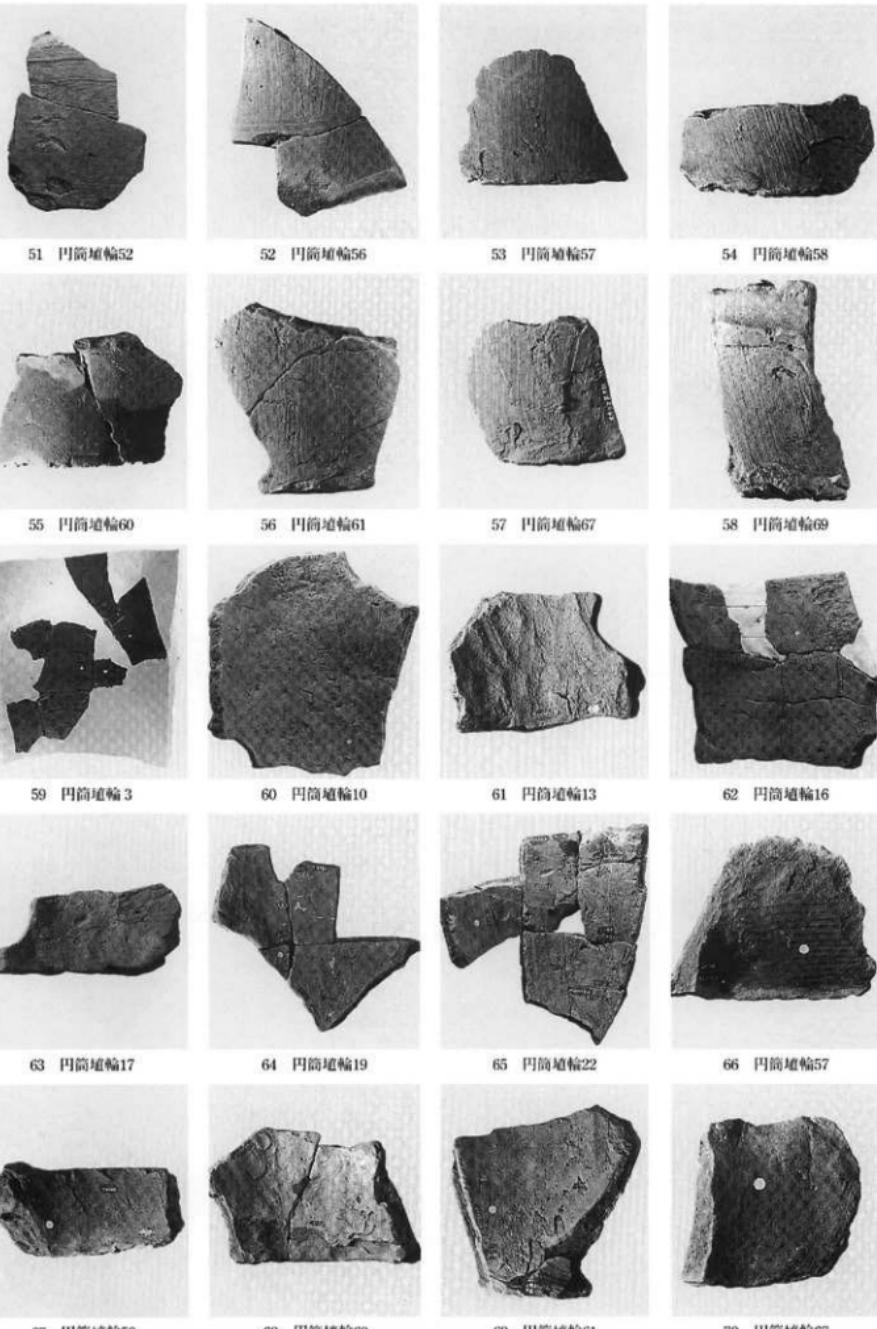


49 円筒埴輪33



50 円筒埴輪46

P L-23 塗輪 2



報告書抄録

ふりがな 書名	おおつかこふん 大塚古墳						
副書名	北原古墳群の学術調査報告書						
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第193号						
編著者名	保坂和博						
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター						
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL.055-266-3016						
発行年月日	2001年3月31日						
所収遺跡名 ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度分秒	東經 度分秒	調査期間		調査面積 m ²	調査原因
大塚古墳 やまとしづか 山梨県 西八代郡 三珠町 大塚	19342	35度 34分 27秒	138度 32分 42秒	1996年2月28日～ 3月12日		180	学術調査
所収遺跡名 種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
大塚古墳 古墳	古墳時代中期	古墳1基(帆立貝式古墳)			埴輪(円筒・器財) 鉄製品 (挂甲小札・鉄鎌など) 石製品(管玉) 土器(土師器・須恵器)	前方部:第2主体部 (竪穴式石室) 前方部北西側: 竪穴遺構	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第193集

2001年3月23日 印刷

2001年3月31日 発行

大塚古墳

北原古墳群の学術調査報告書

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL.055-266-3016

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社 ヨネヤ

